
その執事、大胆不敵

篁 霞流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その執事、大胆不敵

【NZコード】

N6570Y

【作者名】

篁 霞流

【あらすじ】

ピレネー大陸の大部分を占めるカルデア神聖大統一帝国。

その帝国を築いたのは、不幸の果てに王位に就いた女王と泥の中から這い上がった執事であった。

彼らはいかにして、帝国を統べるに至ったのか。
その壮大な物語が今、始まる。

(R-15は念のためです。今のところ予定はありません。)

プロローグ

コルベール暦1544年。

その日、カルデア王国王都ペントラグの王宮殿・フィラデルの大広間横、「控えの間」には静寂が満ちていた。

部屋の奥にはカルデア王国第28代君主たる女王・シシリア＝マイアーニー・イジュー＝ルが玉座に泰然と腰かけていて、その数メートル扉側に下がった位置に一人の男が跪いている。

俯いているので顔の表情を読み取ることは出来ないが、黄金に染まつた髪は「控えの間」の質の良い調度品に埋もれることなく輝いていて、その姿に一分の隙も見当たらない。

「面を上げよ」

女王の良く通る声が、白紙に落ちた一点の染みのように広がってゆく。

声に応えて頭がゆっくりと持ちあがり、それとともになつてその相貌が明らかになつた。

肌は雪のように白く、紺碧と緋色のオッドアイは宝石のようだ、男が『神の造形』と呼ばれてゐることをまさもぞと思に出わせる。

「フォンビレート＝メイリー＝ダ・エルバート。そなたを、第32代イジュー＝ル家の筆頭執事に任命する」

イジュー＝ル家つまり王家の筆頭執事に任命されるとこには、内政の要となる者として任命されると言つても差し支えなかつた。そのため、任命式を執り行つ前に、王国議会の承認が必要であることが王国法第145条にて定められている。此度の任命においてもそうであり、先立つて議会での議決を経ていた。

「先だって行われた王国議会にて、異議10沈黙80により承認されている。よつて、そなたにこの任の如何は委ねられた。この任、受けれるか否か?」

女王の問いかけに、その男 つまり、フォンビレート=メイリー=ダ・エルバルト は伏せていた視線を女王の方へ、ゆっくりと向けた。一点の曇りもない瞳が女王のそれと合わせる。

美しすぎる顔に魅入られながらも、女王はただ言葉を待つた。彼が、誓いの言葉を述べれば受けれるということであり、そうでなければ否任されたということになる。

もつとも、内々に契約が交わされた上でこの儀式を迎えていたので、誓いの言葉以外の返答はあり得ない。

だから、焦点となっているのはもつと別のこと、彼がどんな誓いの言葉にするのかということだった。

誓いの言葉に形式はないため、自由に構成して良いことになっていた。だが、なんでも述べていいものではなく、大抵は王家への忠誠とか國家への愛を詠う。

後々、各報道人によつて国民に公開されることが決まつているそれは、國民と貴族達に今代執事の力を認めさせるのに欠かせない。よつて、つつがなく終わらせることがなによりも重要であり、女王も廊下に控える重鎮たちもそれを期待していた。そしてそれは達成されるはずだった。

「 生涯の全てを懸けシシリニア＝マイアーラード・イジューールの御為に働き、忠節に歩み忠誠を保つことをここに誓う。 」

彼が、女王の名によつて誓わなければ。

歴史書は語る。

彼の男。

碧き左眼と灼^{あらた}かな右眼を持ち、頂に金色を纏い、黒衣を翻し、その純白の肌は朱が染め上げた。

唯唯王と共にあり、千里を焼き尽くす炎と万里を翔る翼を『えられ
た。』

カルデア王国史上唯一、君主のみに忠誠を誓つた男。

「女王の懐刀」「カルデア王国の誓れ」「草原の栄光」とたたえられた有能な執政官。

その才でもつて、史上最高の為政者・シシリニア＝マイア＝ド・イ
ジユールのそばにあり続け、王国に繁栄をもたらした完全無欠の執
事。

王の楯。王の槍。王の力。

フォンビレート＝マイリー＝ダ・エルバルト卿。

彼の波乱に満ちた生涯は、この任命式を持つて、本当の意味での始
まりを迎えた。

騒動の始まり 前篇（前書き）

感想・御意見・御指摘 絶賛受付中です。
よろしくお願いします。

騒動の始まり 前篇

「なんてことをしてくれたのかしら、フォン？」

シシリアの冷たい視線にもフォンビレートは一切動じなかつた。

「申し訳ありません。偽りを述べることは許されない、と聞いたものですから」

素知らぬ顔をして紅茶を手際よく入れている。

フォンビレートが前代未聞の誓いの言葉を述べた後、宮殿は大混乱に陥つた。

なにしろ、録音された音源は國民に公開しなければならないのだ。
『シシリア』マイアード・イジユールの御為に』ということはつまり、王家も國民も眼中にないと宣言したに等しい。影の執政官とまで言われる執事が『何かあつたら、女王以外は見捨てます』と言つていいなど、あつてはならないのだ。

かといって、仮にも『誓い』の言葉を録り直すわけにもいかない。カルデア王国には『誓約したことは果たせ』という簡潔かつ絶対の箴言があり、録り直すなどといつ選択肢は存在しない。たとえそれが儀礼的なものであつても、行うことはできない。

それにも関わらず、顔色一つ変えない自らの執事に、シシリアは苛立ちも忘れて呆れていた。

「あなたね・・・事の重大さがわかつてているの？」

その問いに、ついとほんの少しシシリア側に顔を向け、

「分つております」

と、静かに答えるフォンビレートにシシリアは今度こそがつくりと肩を落とした。

「だいたいね、大人の対応つていうものがあるでしょ？お・とな・のね。別にわざわざ入れる必要はないじゃない」

「しかし、入れない理由にはなりません。それは誤解を招くと知つていながら行う性質の悪い、詐欺にも等しい行為です。陛下はまさかそのようなことを望んでおられたのでしょうか？それでしたら、私は深い謝罪を行わなければなりません。陛下の御心を酌めない私など・・」

「もういいわよ！――」

フォンビレートの長々と続く嫌味にそつそつと白旗を上げる。もとより、口から生まれてきたとしか思えないこの執事に勝てた試はない。かれこれ13年もの永い間、連戦連敗である。

「よくわかったからいいわよ。・・・あなたつてもとからそうだし。・・・20も年下の男に言いくるめられる女王ってどうなのよ、本当に」

やや自嘲気味にぼそぼそと呟くシシリアは今年で43才であり、カルデア王国の寿命でいえば「中年」の部類である。一方、フォンビレートは今年18才になつたばかりであり「青年」あるいは「少年」と呼んでもいい年齢であった。もちろん、歴代筆頭執事の中でも最も若い。

「陛下、問題は25才年下かどうかではなく、たかが一使用人に勝手を許していることであるかと思われますが」

「うん、とりあえずそれ止めて頂戴。腹立たしくてこのまま王位も放棄してしまいそつだから」

さりげなく正確な年齢差を示しつつ、眞の問題点を指摘するフォンビレートを、シシリアは半眼になつて睨みつけるが、彼はやはり顔色一つ変えずに

「どうぞ」

と、何事もなかつたように紅茶を差し出した。

コトリ。と僅かに音がして、テーブルの上に湯気の立ち上るティーカップが置かれる。

「本日は、アルイケ産の茶葉を使用しております。こちらの地方の茶葉は近年人気が出てきており、試しに卸させてみました。お口に

合いましたら継続的に買い取りを行おうと思つておりますので、率直なご感想をお願い申し上げます」

さりげなく話題転換をされたことがシシリアとしては大いに癪に障るのだが、実際このまま言い合いが続くほうが不毛があるので、しぶしぶながら紅茶に手を伸ばした。

口に含んだそれは、たしかに薫り高くほんのりと甘い。

「ん、美味しいわね」

シシリアは言われたとおりに感想を漏らした。だが、

「それはようございました。毒入りの茶葉を注意深く避けた手間が報われたというものです」

「は？」

続くフォンビレートの言葉に思わず聞き返した。

「それはよう」「・・・」

律儀に繰り返そうとするのを田線で遮る。

「なにに何がいれられていたって？」

「昨日、商人より買い付けた茶葉に毒が入れられておりました。・・・より正確に言うならば、毒で満たされた液体につけられた茶葉が昨日、卸されました」

冷静に話すフォンビレートに対し、シシリアは事実の認識を拒否するように田頭を揉んだ。

この、恐ろしく頭のキレる執事がすべて手をまわしているには違いないのだが、続きを聞くのはなかなかつらいものがある。狙われたことも一度や2度ではないが、しかし、いつも冷静に話すことでもないとと思う。

「・・・いろいろ聞きたいことはあるのだけれど、・・・とりあえず、なぜ昨日のうちに報告が来なかつたか、から聞きましたか。なぜ？」

顔をあげたシシリアの顔が為政者のそれに変わる。

その信頼と猜疑の入り混じった視線を受けて、フォンビレートは口を開いた。

「昨日のうちに御報告申し上げなかつたのは、毒入りの茶葉の回収に手間取つていたためです」

「大量に卸されていた、ということ?」

「いえ、そうではなく、王国中に出回っていたということです」

「・・・なんですか?」

「アルイケ地方の茶葉は、昨日の夕方に卸された茶葉が本年最初のものでした。よつて、昨日は王国中に出回る予定でした」

「それで?」

「卸しに来た馬車を確認致しましたところ、すべての、つまり王宮殿に卸される茶葉以外も毒に浸された状態でした」

「・・・商人はどうしたの?」

「確認させるように要求しても動搖せず、むしろ、気に入られたのかと笑みを浮かべていましたので、ひとまずは害はないと判断して後回しにしております」

「・・・回収は?」

「滞りなく。ひとまず、王都中の貴族には触れを出し、また市場へ卸したものについては早急に買占め、富殿倉庫に保管しております」

「・・・地方は?」

「そちらは、門のところだとどめることができましたので1グラムたりとも外に輸送されてはおりません。本日、第14刻に事態の収束を確認いたしましたので、アフタヌーンティーとともに御報告申し上げた次第です」

その言葉にシシリアは壁の時計に目をやり、それから思いつきり胡散臭い目をフォンビレートにやつた。

「・・・あなたつて二人いるのだっけ?」

現在の時刻は14刻半。

フォンビレートが事態の収束を確認してから半刻しかたっていないのである。

「御冗談を」

「あなた、13刻の時点で控えの間にいたわよね?」

「 もちろんで」「ぞ」こます

フォンビレートがうなずくのを見ながら、自らも頭の中で確認する。

「 ・・・じゅりやつて動いたのみ・・・執事の儀式を進行しながら暗殺を食い止めるなんて・・・」

「 恐れ入ります」

「 で、黒幕は分かっているの?」

「 大方の検討はついております。確たる証拠として採用できるものは未だにございませんが、それでもようしければ」

「 だれ?」

端的なシシリアの言葉に、フォンビレートもこれまた端的に答える。「ジーモス＝ダイナン＝ダ・アルイケ侯にござります」アルイケ侯爵とはその名が示す通り、茶葉の産地アルイケ領をおさめる領主である。

王家にも近い家柄である。

「 ・・・根拠は?」

「 そのことをお話しするためには、昨年の春からの出来事を追う必要がありますが、よろしいでしょうか?」

「 話しなさい」

フォンビレートは僅かに目線を下げ、了承の意を表した。

「 昨年の春のことです。門衛より『商人が面会を求めている』という報告が上がりました」

「 昨年、ということは王宮殿ではなくメリバ宮殿のことね」メリバ宮殿というのは、王位継承権第1位の者が住まうことになっている宮殿であり、そこに住まうということは次期国王であること暗示している。昨年の春は、ヘンリル前国王が生きていたため、

シシリアはそこで過ぐしていった。

「はい。その通りでござります。シシリア様が遠出をされていましため、私が対応いたしました。その東門に現れた男は、ヒデロム伯の御用達商人であると言い、最近いいオルフェル産の茶葉が手に入つたのでは非賞味してくれないか、とのことでした」

ヒデロム伯爵領はメリバ宮殿の周りにある。より正確に言つならば、ヒデロム伯爵領地内にメリバ宮殿という飛び地を王家が所有していることになつてゐるのだ。よつて、その地の行商が宮殿を訪れたとしてもなんら不思議ではない。

「それで?どうしたの?」

「丁重にお断りいたしました」

「なぜ?」

ヒデロム伯爵位は建国の時からつき従つ名門貴族であり、名騎士を多く輩出していることから「忠義の伯爵」と呼ばれてゐる。故に、王家からの信頼も厚く、宮殿の周りを任せせるほどである。ヒデロム伯爵領に関しては、かなりの優遇措置をとることが暗黙の了解となつていた。

今回のような件がある場合、警戒はすれど門前払いするほどではない。

「理由はつづけます。一つは、その男が浅黒い肌だったことです。」

「それが?」

ヒデロムの住民は皆、東方系の血筋であり、その特徴は目のふちの赤みと浅黒い肌にある。おかしなところはない。

「極めて純粋な、浅黒さでございました」

純粋な、と強調したフォンビレーの言葉にシシリアは僅かに目を見開いた。

「それは、変だわ。・・・ヒデロムは既に混血の民族となつていて純粋な者などどこにもいない。せいぜい伯爵家が限りなく近い、ぐらこのものでしょ?。そして・・・」

「はい、伯爵家が商人の振りをすることなどありませんし、まして私の記憶にない伯爵家人間などいるはずもございません」

フォンビレートの自信を持った言い切りに、シシリアも頷くことで同意する。

フォンビレートが18才という若さで筆頭執事まで上り詰めることができた理由の一つは飛び抜けて目端が効くことであった。国内のあらゆる貴族、その使用人に至るまでフルネームはあるか家族構成まで述べることのできる頭脳と、人並み外れた観察眼。

ゆえに、仮に伯爵家の者が冗談で変装していたとしても、彼が見破れないことなどあり得なかつた。

「第2に、一昨年から昨年にかけて、ヒデロム領地は南のオルフェルが大飢饉に襲われております。無論、全体としては例年通りの収穫でしたから、死者は一人も出でおりませんし、表にもあらわれていません。しかし、オルフェルの特産品である茶葉は例年の10分の1しか獲れず、価格は高騰しました」

シシリアも報告書だけで上がっていた大飢饉の顛末を思い出す。確かに茶葉の価格は上がっていて、そのまま卸しては買い手がつくはずもなく、一方、その価格でなければ売り手の生活が成り立たなかつた。そのため、ヒデロム伯の裁量により救済措置がとられた。

「救済措置は、伯爵家が全ての茶葉を買い取り領地に例年通りの價格で卸すこと。ではなかつたかしら」

「はい。それでもまったく値段が上がらないということはあります。しかし、彼の提示した額は例年通りでした。よつて、伯爵領下の商人ではなく、まして運んでいた茶葉はオルフェル産でもないということになります」

シシリアの雰囲気が徐々に鋭さを増してゆく。

「・・・・・第3の理由はなに？」

「その者を持つてきた茶葉を入れた麻袋から、微かにラベンダーの香りがしたことです」

「ラベンダー？ ヒデロムにラベンダーは咲かないはずよ？」

「その通りで」
「おそらくは、ラベンダーの咲き誇る道を通りてきたものと推測されました」

「…」

「陛下、そのような道があるところを、記憶でしょつか？」

「…もちろんよ、アルイケ侯爵領とビデロム伯爵領を結ぶ、3キロの道のり。特に、人目を避けて、野を突つければ余計に匂いが付くでしょうね」

ここにきて、問題の茶葉の産地・アルイケ侯爵領が登場した。

「はい。よつて門に現れた商人は、本人の申し立てたビデロム伯爵領下の商人ではなく、アルイケ侯爵領下の商人であると結論付けました」

アルイケ侯爵領下の商人であるとすれば、最初の2つの違和感に対しても理由をつけることが出来る。アルイケ侯は確かに東方系の子孫であり、血統主義を標榜しているため未だその特徴が色濃く継がれています。

それに、アルイケ領は昨年は全体的に豊作であった。特に領の西側・キップは茶葉の出来がすばらしくよかつたという。王家にも献上されたため、シシリアもよく覚えていた。

「間違いないでしょうね…」

「はい、おそらくは。アルイケ領下であるならば優遇の必要性はなく、むしろ領地を偽つたことで警戒の必要な人物であると言えます。よって、丁重にお断り申し上げました」

フォンビレートは、ぬるくなってしまった紅茶をさりげなく取り上げながら、話を締めくくつた。別の茶葉に入れ替え、丁寧にお湯を注ぐ。その作業に細心の注意を払っているフォンビレートにシリアの声がかかった。

「で？」

「で? とは?」

フォンビレートが哲学問答のように答えて見せれば、シシリアは盛

大に眉をしかめた。

「で？は、で？以外の何物でもないわ」と問答で返し、小さな意趣返しを行う。

「それでは、アルイケ産の茶葉が毒入りになつたことと何も繋がらないわ。どうせ、有能な執事たるあなたには分かっているのでしょう？聞かせなさい」

「・・・」
「ご要望とあらば

シシリアの投げやりに言われたことを気にすることもなく、フォンビレーントは続けた。

「帰つて行く男を隠密方につけさせました。案の定、その男はアルイケ領に帰つて行つたわけですが・・・」

「何を見たの？」

「その茶葉を、途中のラベンダー畑の中に撒いた後、悠然と去つていたそうでござります。」

「まあ、用済みだものね」

シシリアは思つたより、それがひどい報告ではなかつたのでほつとしていた。「ゴミの廃棄などして欲しくはないが、茶葉はそのまま栄養となるのだ。たいしたことではあるまい。だが、その考えは次の報告で打ち砕かれた。

「その2、3日後、ラベンダー畑の4分の1が枯れ果てました」

「えつ？」

「持ち帰らせた茶葉を検分しましたところ、猛毒・シュバルツであることが判明しました」

「シュバルツ！？」

その毒物の名前に、シシリアは落ち込んでいたことも忘れて、叫んだ。

シュバルツというのは、「シュバルツの花」という植物の根からとれる猛毒である。致死量は小指の先ほどあれば良いとされており、盛られた場合、十中八九助からない。この毒の最大の特徴は、気化

しそうが液状化しそうが粉状化しそうが毒性を持ち続けることにあります。つまり、吸うだけで死にいたる可能性すらあるのだ。よって、国の危険物指定を受けており、所持しているだけで罪になる。そんな毒が、得体のしれない商人の茶葉から出てきたのだ。

「では、ラベンダーへ追跡を行った者や、……あなたは？大丈夫だったの？」

心配げな瞳をするシシリシアに対し、フォンビレートは僅かに微笑んだ。

「御心配には及びません。今回と同じく、粉末ではなく液体の形で用いられていました。シユバルツに茶葉を浸し、それを持ってきたものと思われます。大地へ浸みこむことを止めることはできませんでしたが、素手で触る愚行さえ起こさなければそれほど被害はありません。そして、イジュール家にはそのような愚か者は存在しませんので、『心配には当たらないかと』

「……あなたって良い性格しているわよね。……敵だって、まさか「愚か者」しか引っ掛けないと言われているなんて思いもしないでしよう！」

フォンビレートのイジュール家使用人としての誇りと敵を見下す気持ちがないまぜとなつたそれに、シシリシアは呆れたように笑つた。

「いえ、陛下に歯向かう者は全て愚か者にござりますので、死ぬ者もあるやもしれません」

不敵な表情ではつきりと言い切るフォンビレートにシシリシアは何とも言えない心持ちになつた。彼の絶対の忠誠心はいつだつて気持ちが良い。

「・・・続きはいかがなさいますか？」

「もちろん、聞くわ

フォンビレートからの信頼を背に、シシリシアは覚悟を決めて深くうなずいた。

騒動の始まり 後篇（前書き）

ここでは、ストックがキレましたので（いや、早っ！とかいう突っ込みはなしでお願いします）更新が遅くなります。週1が限界ですのでも、ゆっくりお付き合いいただければ幸いです。

「さて、アルイケ侯ジョームズが陛下を狙つたという仮定を立てますと、動機が見当たりません。先の大戦の前アルイケ侯ケアリーの働きはすさまじく、その働きへの報いとして侯爵位は授与されます。ジョームズは野心のある人物ではありますが、陛下を毒殺することにより得られるものと、企みが明らかになつた場合に失うものの比重が釣り合つていないようと思われました」

例え、シシリアが殺されたとしても侯爵であるジョームズにはなんのメリットもない。確かに、国政の重要な局面に立ち会うかもしれないが、所詮は侯爵位であり公爵位には敵わない。3公が愚かであれば違うかもしれないが、今代公爵達はそれに優秀であった。故に、決定権を荷うことはまずないだろうと思われる。

「・・・それで？あなたの突き止めた動機って何かしら？」

「陛下、私が、一日の休暇を申請しました事を覚えておいででしょうか？」

「ええ、覚えているわ。それも、昨年の春ね」

フォンビレートは5才の奉公以来、ただの一度も休暇を取ったことはない。彼自身に行くあても帰るあてもないということもあるが、重度の仕事中毒者であることがその主な理由だ。休暇を取るようになると勧めても拒否し、無理やり休ませても邸内の草むしりを始め、問い合わせれば「休暇ですので、自然と触れ合つております」としつと言い放つ。

だから、フォンビレートが「お暇を頂きたく・・・」と言つた際、誰一人休暇の事だとは思わず執事を辞めてしまうのだ、との思い込みによる大騒動に発展したのだ。

必死にひきとめたことが今となつては懐かしい。

「その日、私は王都に参りましてヘンリル前陛下と非公式にお会い

致しました

「父上と?」

「はい。目的は王国法の原本を見る」と、もしくは内容を教えて頂く事です

『王国法』とはその名の通り、原則から細則までありとあらゆる法律が定められた法典である。そのほとんどは国民議会により可決されてから付け加えられたものであり、建国時の法律と合わせて閲覧可能であるが、例外は存在する。

「原本・・・ということは、王位に関する法律が見たかったということ?」

王位に関する法律は、一般に公開されておらず（もちろん、基本的な部分は建国の際に明らかにされているが）王位篡奪者による暗殺を防ぐため、基本的に発表されない。第1位継承者は発表しなければ内乱の危険が高まることと、メリバへ住まうことが定められているため隠すのが困難であることから、第1位だけは発表するようになつている。

「はい、その通りです。もちろん、ある程度の確信のもとに向かっておりました。」

「確信?」

フォンビレートの鋭い双眸がふつと鋭くなり、話が核心に近づいていることが分かつた。

「陛下はご存じ無いかもしませんが、前アリイケ侯ケアリーは、ヘンリル前陛下の治世のおり、王位継承権を得たことがございます。流行り病により、一時的に直系王族が絶えた際、第1王女シユレ様の御子にあたる前アリイケ侯、当時のアリイケ伯ケアリーが、第1位継承者となり「ケアリー王太子」であつたことがあります」

衝撃的な事実に、シシリヤは驚きを隠せなかつた。

彼女の知るケアリーとは、野心はあるが王位篡奪を狙うようなものではなく、領地を良く治める為政者であつた。昔、王位継承権を持つていたことなど知りもしない。もっとも、それは彼女の生まれる

ずっと前のことであり、知つていなくとも当然と言える。逆に言えば、知つてゐるフォンビレートがおかしいのであって、シシリシアとしては問い合わせたい気持ちでいっぱいであった。時間の無駄であることは承知しているので、それを断念して黙つて先を聞くことにしたが。

「1年ほど、より正確に言つならばコルベール暦1480年の秋までは第1位継承者であり、1501年まで継承権を保持していました」

「1501年、ということは、私が生まれるまでということね」

「その通りです。陛下の誕生により王位継承権第5位までが埋まつたことになり、そこで前アルイケ侯ケアリーは継承権を失いました。もつとも、第1位継承権は随分と前からありませんでしたから、侯爵が継承権を失つたことはそう大きな話題とは成らなかつたようですが」

「まあ、そうでしょうね。で、その話と今回の毒入り茶葉はどういひながらのかしら?」

「はい。前アルイケ侯ケアリーの死後、相次ぐ事故死により陛下が王位に就かれることになりました」

「そうね。・・・あつ、もしかしてお兄様やお姉様を殺したのがアルイケ侯つてこと?」

兄や姉を失つた悲しみを未だに引きずつているシシリアは血相を変えてフォンビレートに詰め寄るが、彼は首を振つてそれを否定した。「いいえ、それに関しては全く事故であることが、調査委員会によつて証明されていますし、真相といつたところで推測に至るのがせいぜいです」

シシリアは落胆の色を隠せずにうつむいたが、続く

「但し、それが原因であることは確かでしょ?」

という言葉に、再び顔を上げた。

「えつ?」

「その死に、多くの人々が共通の懸念を抱きました。つまり、王家

が途絶えた場合、内戦になるのではないか、という懸念です。しかし、王位に関する某かの動議は国民議会において提出された形跡はありません。かといって、懸念だけ抱いたまま何の手立ても用意しないといふことも考えにくい。とすれば・・・

「御前会議ね・・・」

「はい、それによつて何らかの手立てが用意されたと考えることが出来ます。それを確かめるため、ヘンリル陛下に面会いたしました。

「・・・結果は?」

「もちろん、一使用人の立場で原本を見ることは敵いませんでしたが、ヘンリル陛下は質問に答えてくださいました。一昨年の冬に御前会議にて、王国法第1条に細則が加えられることとなつたようです。」

「一昨年の冬・・・」

「はい、カイル殿下がお亡くなりになつたことがあります」
第4王子であるカイルは、シシリアの5つ離れた兄である。当然、当時は継承順位が第1位であり、カイル王太子としてメリバ宮殿に住んでいた。ヘンリル国王の先は長くないと予想されており、優秀であつたカイル王子が繼ぐことに貴族・国民ともに異議なく、その治世に期待するむきもあつた。そのため、彼が肺結核で亡くなつた時、人々は悲しみにくれヘンリル国王もひどく沈んだ。そのことがもとで昨年の春に体調を壊して伏せり、結局、失意のまま冬に亡くなつたわけだが。

「お兄様は優秀だつたものね。・・・私とは違ひ父上にも期待されていた」

正直にいえば、シシリアは誰にも「王」として期待されていなかつた。もちろん、1人の子どもとしてそれなりに愛されていたことを否定はしないが、それでもやはり次期王としてメリバ宮殿に入ることになつて父王に挨拶に出向いてもいい顔をされなかつた時の悲しみは深く根付いている。

「ヘンリル陛下は、国政の乱れを恐れ、御前会議が提案した細則に反対されなかつたようです」

シシリヤの発言には特に言及せずにフォンビレートは続けた。彼自身としては、ヘンリルがカイルに多くの期待を寄せていたが特別シリヤの治世を心配していたわけでもない、と思つてゐる。ただ、王位継承直前に失つた、その喪失感に耐えきれず、王位継承者として跪くシシリヤの姿にカイルを見て直視できなかつただけではないかとも考へてゐる。ただ、これは考へでしかなく、シシリヤを慰めるには材料が足りな過ぎるため、フォンビレートが口出すことはなかつた。面会に際してヘンリルが口にした事実のみを伝える。不確定なことを主人に対しても口にはしない、というのがフォンビレートのモットーであり、それゆえ彼は「優しく」はないが「優秀な執事」であつた。

「その内容は？」

シシリヤもフォンビレートが話を逸らしたことに気付いたが、それが彼の誠実さでもあることを知つてゐるので特に追及したりもしなかつた。なにより、落ち込んでいる暇はない。

「『直系王族が死に絶えた場合、その直系王族第1子の男子の家系が王位を継ぐものとする』といつものです。これは、御前会議により評決されたものであるため、一般には一切知られません。また、第2位以下の王位継承権の発表も正式にはなされないため、国民が知る様になることは無いでしょう」

ようやくシシリヤにも話の全容が見えてきた。

御前会議で決定されたということは公爵3人、侯爵4人の合わせて7人だけで採決が行われたことを指す。当然、その中にはアルイケ侯ジエームズも加わっていたはずだ。王国法の原本はその7人と王の合わせて8人がいなければ決して開くことのできない王室金庫に保管されることになつており、よほどのこと無ければ確かめることもできないし、されない。王国法の改正にあたつては、採決から半年後に王宮筆頭書記官により8人の立ち会いのもと書き加えられる

ので、その際一部の役人は知ることになるが、王位に関する法律は公表の必然性をもたないので公に知られるようなことはない。そして、王位継承者は御前会議内でのみ確認が行われ、「公式」の発表は行われない。

つまり

「つまり、現在第1継承権は第2王子ミシェル様の御子ダン殿下ではなく、第1王女第1子前アルイケ侯の家系にあるということになります。すなわち、陛下がなんらかの事情で王位を放棄された場合、王権 자체がアルイケ家に移る、ということになります」

王家を守るために秘密を逆手にとって、アルイケ侯はまんまと第1王位継承者の地位を勝ち取つたのだ。

それも、イジュー家からアルイケ家に直系を返すことさえ可能な法律を可決させて、である。

シシリアは即位したばかり。メリバからの引っ越しは使用人の失態で未だ完了していない。継いだばかりの王に対しても『王位継承』などという早急な案件ではない報告を意図的に後回しにされれば、シシリアが聞くことは無い。遅くともあと数ヶ月すれば第1継承者は発表されるだろうし、王国法原本を見る機会もあるかもしれないがあくまでそれは数ヶ月先であり、このままシシリアが殺されれば彼は誰にも気づかせずに王位に就く。

「おそらくアルイケ侯ジョームズは、前アルイケ侯ケアリーより王位が目の前にあつたことを聞いたのでしょう。そして、ちょうど良く直系の王位継承者は1人だけになった」

そこで、野心を刺激された侯爵が企てたのだ。

時間をかけて、周到に準備をして、何も知らない今までシシリアを消してしまおうとして。

「こうなると、本当に直系の王族が事故死であつたかどうかが疑問になつてきますが、既に調べる術は失われております。当面にして唯一の問題は、彼が毒入りの茶葉を宮殿にすらよこしたことです」

シシリアはしばし呼吸を忘れて、茫然とした。

アルイケ侯が裏切ったこともそうだが、その他の6家も筆頭書記官を含む上役人の一部も、間接的にこの暗殺を承知していることを知つたからである。彼らが御前会議にて提案される内容に事前に目を通さないはずがない。国政を担つてきた彼らがアルイケ侯の狙いに気付かないはずはないのだ。提案自体はそれほど外れではないが、それを共同で提案したということは、それをシシリアに報告しなかつたということは、「アルイケ侯が王位に就く可能性を彼らが認めた」ということである。もつと言えば、アルイケ侯が王位に就いた後、それでも、国政に関わる自信があつたということになる。

「彼らは・・・奴ら・・・・・」

シシリアの顔は怒りと悲しみと恐怖とで震えた。

命を狙われることは何度もあつた。貴族から狙われることも他国から狙われることもあつたが、国の重鎮たる7大公侯爵家に裏切られるとは、それも王位を継いだ直後に狙われるとは思つてもいなかつたのだ。

「やはり父上は、私の事など気にしていなかつたのだ」「

揺れる思考の片隅で考える。

父がアルイケ侯の、ひいては7大公侯爵家の企みの可能性を見逃していはずはない。

つまり、自分は国政に難ありと判断され、殺されたとしても良いとされていたのだと。

ああ・・・

「王になりたいなどと誰が言つた?」

「誰かがお兄様たちを殺した?」

「誰が・・・味方なの?」

次々と口から溢れる繋がりのない言葉は、悲痛な響きを伴つて部屋に響いた。

そこに女王としての威厳はなく、ただただ父を慕い求める幼子の途方に暮れた表情があるだけである。

「いかがいたしましたか？シシリア様」

突然、シシリアの絶望に一筋の声が通る。フォンビレートの冷たい声に、意識が急速に浮上していった。

目線を上げれば、フォンビレートのいつもの瞳がこちらを見詰めていた。

その瞳は、彼が第三執事、つまりシシリア付きの使用人の中で最上級使用人となつた日のことを思い出させた。

約3年前。

フォンビレートは、ちよびと回りにシシリアの側に立っていた。

その時、シシリアは王宮殿の近くアーテル宮殿に住んでいた。次期国王でない王族は全てここに住まう。シシリアもそうであり、しかしそこに住まうただ一人の直系王族であるがためにそこの中でもあつた。フォンビレートは15才。その若さでは・・・と多くの使用者から反対されたがシシリアはそれを押し切つたのだ。

その任命式 筆頭執事の任命式に比べればもつと簡素なものだがにて、ヘンリルについていた当時のイジュー家の筆頭執事ダニタ＝イエール＝ダ・クレマは問うた。

「汝、何を願う」と。

それに答えたフォンビレートは一切濁りのない瞳でシシリアだけを見詰めて

「シシリア様は私の確信。私の信頼。私の全てにござります」

「滅ぼせとおっしゃるのであれば徹底的に滅ぼします。壊せとおっしゃるなら完膚なきまでに壊します。守れとおっしゃるのであればどこまでもお守りいたします」

と言い切つたのだ。

それは、執事の答えとしてはとても合格点を取られるようなものではなかつた。

執事とは時に主人をいさめることも必要であり、全体としての主人

の評判のために尽力する存在である。主人の願いを全て叶えたいといつのが執事の本望とするところであるが、それだけで「良い執事」とは成りえないのだ。

だから、それを聞いたダニータも血相を変え、フォンビレートを叱らうとした。彼自身もフォンビレートの就任に最後まで反対していた1人であったので、「やはり」という思いも強かつたのだろう。その叱責を止めたのはシシリアである。

「いいわ、いつでもどんな時でもあなたは私のただの味方でいなさい」

それにフォンビレートは、頭を垂れることで答えたのだった。

「王家など・・・この国など知ったことではありません」

それは、国民に聞かれれば啞然とするであろう一言。だが、シシリアに之ってはなによりも甘い。「陛下」ではなく「シシリア様」と言つことによつて、フォンビレートはシシリアの絶対の味方であることを示したのである。

「私の誓いの言葉は一片の偽りも含んではいないです。」

故に「命令ください」とフォンビレートはかつてのよつて頭を垂れた。手足となりましよう、と無言のうちに四肢を差し出す仕草に、シシリアの頭が働き始め、この事態への最も効果的な処置を探し始める。

数分の沈黙の後、シシリアは命令を下した。

「
「御意」

フォンビレートは優雅に一礼すると、シシリアの私室を出て行つた。

ただ、主の理むものを備える手段を整えるため。

誇りと傲慢 前篇（前書き）

公言した期日を守れてよかったです、と一安心の作者です。
引き続き、御感想・御意見応募しておりますのでよろしくお願いします。

「まったく、忌々しいものだ」

アルイケ侯ジョームズは、王都にある自分の屋敷の執務室にて壁をにらみつけるようにして独りごちた。

彼は、用意に用意を重ねた計画が寸前でとん挫したことに腹を立てていた。

「あの、くそ坊主め！！！」

腹立ち紛れにたたかれた机は、大きな音を立てて震えている。

彼の言う「くそ坊主」とは、イジュー家の筆頭執事・フォンビレーーのことであった。

今年、55才になつたジョームズにしてみればほんのひょっこに過ぎないはずのフォンビレーーに阻止されたことが、計画失敗のいちらだちに拍車をかけている。

昨年の春の失敗の際には、失敗した男の首を打ち、代わりの者を雇うことで怒りをおさめたが、今回失敗したのは彼の腹心の部下である男だ。代わりなどそう見つかるはずもなく、首を撥ねられるはずもない。

「申し訳ありません。まさか、あのよつな手段を使われるとは思いもよりませんで」

失敗した部下は、壁際にてうなだれている。

あのような手段、つまりフォンビレーーのとつた手段はシシリヤの想像をはるかにこえる強引さで行われていた。非常識、と呼んでも差し支えがないほどに。

「まさか、王国中に国庫の10分の1をばら撒いてまで回収に乗り出すとは思いもしませんでした」

部下の言葉にジョームズは一層眉間にしわを寄せ、先週の計画の顛

末を思い出す。

そもそも、計画は2段構えであった。

毒入り茶葉で殺してもよく、誰かが死んでもその対応を非難する」とでシシリヤを退位させることができるように計画を練っていた。シシリヤはこれまで表舞台に立ったことはなく、カイルのように国民の指示を受ける基盤があるわけでもない。貴族の間では、あの執事を使いこなしているということで一目置かれていたくらいのものだ。

よつて、ジエームズが吹けば飛んでいくような政権である。それも、7公侯爵の暗黙の了解を経たのであり、1つでもシシリヤ側がミスを犯せばそれで事足りることが明白であった。

だが、フォンビレートは対応においてただの一つもミスを犯さなかつた。

彼は、商人が来た時点でジエームズの側近であることを見破つたそぶりを見せたが、ただそれだけで特に言及しなかつた。茶葉を確認しただけで、すぐに茶葉の回収にあたつたのである。

もしも、その時に商人に扮した側近を拘束していたか、あるいは疑惑を投げかけただけでもシシリヤは非難されていただろう。彼は運んだだけの人間であるということを証明する十分な証人が揃えられていたからである。また、側近を捕らえようとすれば、彼は抵抗に抵抗を重ね時間を稼ぎ、その間に茶葉はばら撒かれていたはずだ。だが、フォンビレートはそれをせず、ただ「茶葉を調べさせていただきたいのですが」と下手に出て、茶葉を確かめるにとどまったく。よつて、側近をだしにした時間稼ぎは使えなくなつたのである。次に、フォンビレートは茶葉を回収するために大胆な策に打つて出た。

国庫の10分の1 本来は、王都から王国の最果て・コモロ辺境伯の領地までを結ぶ道路の整備に使われる予定だったお金 を使って、

仕事にあぶれた男を1000人雇つた。

彼らに「黒塗りの馬車を見つけたらすべて倒せ」と命令を与えて町中に散らしたのである。

それも、給金は後払いだと言つて。

仕事を遂行できなければ給金をもらえないと知つた彼らは猛然と街中を疾走し、命令通りアルイケ領下の馬車の特徴である黒い幌をまとつた馬車を見つけたらもれなくすべて道にひっくり返したのである。

中には、茶葉でない品を運んでいる商人もアルイケ領下の商人でない者もいたが、フォンビレートはそれらの馬車に対し商品を3倍で買い取ることを取り決めて彼らを宥めた。

茶葉を運んでいた者に対する「命にかかる事態に対応しただけだ」と言って、その行為を正当化することで不満を抑え込んだ。

最後に、王都北門を除くすべての門に対して「緊急宣言」を発令。すべて、閉鎖したうえで北門に殺到した馬車を1台1台丁寧に調べたうえで、茶葉を積んでいた商人だけより分けたのである。

そのより分ける作業が完了した、つまり、計画の失敗が明らかになつたのは、ジエームズが事を仕掛けてから26時間後のことである。

その結末を部下から知られた時、ジエームズは血の気が引いて行くのが分かつた。

失敗に終わったことやそれによって自分が罪に問われるかもしれない、ということではなく、フォンビレートが任命式に出席しながら片手間に事態を収束させたことに鳥肌が立つた。

「あの男は・・・どうなつておる!..」

彼の叫びに答えを持つ者は、彼の部下の中には誰もいなかつた。ただ、主とともに背筋に冷たいものを感じることしかできない。

「練り直すぞ・・・シユットガルツ。ルシアを呼べ!..」

ひとしきりに怒りを発散していたジエームズだが、すぐに頭を切り

替え部下に指示を出し始めた。

同時に、フォンビレートに対抗するのにこれ以上はないと思える部下を呼びにやる。

「・・・あ奴には隙はないが、シシリアの方は隙が大分ある。あの二人を分断するためにはどうすればいいと思う?」

シシリア、と呼び捨てにするジエームズは彼女を見下していた。彼の考えを最大限に良く解釈するならば、シシリアが政権を取つてもうまくはいくまいと思っており、国民の平和と安全のために自分は王位に就かなければならぬことになる。

優秀な右腕を引き離せば、数段劣る頭脳しか持たぬシシリアはすぐにでもボロを出すはずだ。

そう考えたジエームズが計画の通達を行おうとした、その時。

コンコン、と控えめなノック音が響いた。

「ルシアか?」

呼んだ者が来たのかと思い、誰何の声をあげた。

「いえ、お客様にございます」

だがその期待を裏切り、扉の向こう側で答えたのは執事であった。先に人払いの命令を行い、自分が出てくるまで訪問者を知らせなくても良いと伝えていたジエームズは多少いぶかしく思い、「だれだ?」

と苛立ちもあらわな返事を返した。

廊下の向こう側から聞こえた声は、執事の声であり、今までになく焦っている。

「申し訳ありません。女王陛下の使いの方がお見えのようです」

女王の使い

「フォンビレートか?」

心臓を驚撃みにされる感覚に陥ったジエームズが、執事の微妙な物言いにも気づかず、思わず呼び捨てにしたその言葉に答えたのは、

ジエームズは呼吸も忘れて扉を凝視したまま固まってしまった。

それに倣つようと、室内にて指示を仰ぐため集まっていた全員も動きを止める。

その静寂の中、空氣を一片も崩すことなく異常なほど静かに扉は開けられ、隙間から入つた光が細身のシルエットを室内に落とした。それによつて空気がほんのわずか揺らぎ、ジエームズは意識を取り戻した。

彼は、侯爵としての正当な権利を主張し一步も立ち入ることを禁じようつと声を張り上げようとした。

「貴様！なんの権限があつ・・・」

なんの権限があつて、侯爵執務室に立ち入るつとしているのだ！！！
そう続けようとした彼の声は、その影の全体像が見えたことで途切れる。

入ってきたその男は、彼がここ数か月で見慣れた男そのものだつたからだ。

「貴・・・様・・・・・なぜ、お前が・・・・・フォンビレー
トなの？」

混乱した彼の口からは、意味の通らない質問が零れおちた。

「さて、なぜでしょ？アルイケ閣下」

対する彼、つまりフォンビレートは顔に不敵な笑みを浮かべただけで質問に答えもせず、ずかずかとジエームズの目の前まで足を運ぶ。
「お久しぶりです。と申しましょうか・・・・はじめまして。がお好みですか・・・・それとも・・・・

頬をあげたまま小馬鹿にしたようにフォンビレーは続ける。

「御主人様、が一番しつくらぐるでしょうか？」

彼が最大限に警戒していた者の声であった。

「ええ、あなたの憎きフォンビレーでござります」
むかつくほどに涼やかな声で。

御主人様、と彼が言つた瞬間、ジェームズ以下すべての人間の顔から余裕が消え去つた。

この時を遡ること、数か月前。

メリバでのシシリア暗殺が失敗に終わったことに腹を立てたジェームズは、衝動的はねてしまつた部下の代わりを探していた。後をつけられたことが明白であり、数週間、やきもきさせられたことがそのような行為を後押しした。

だが失敗したその男はそこそこ優秀な駒であり、首をはねてしまつたことを後悔していたジェームズのもとに、王立・ペントラグ孤児院の院長イッサー・ラが訪ねてきたのだ。

彼は一人の孤児を連れ、その子を雇つてくれないかと頼みに来たのだった。

イッサー・ラは王国内でも識者として良く知られた人物であり、ジェームズほか、現在爵位を継いでいる男子は彼の教えを一回は受けたことがあるといわれるほどである。

彼が、孤児院に秘蔵つ子を隠しているという噂は貴族の間でよく知られた噂であり、「その子を連れてきた」と言わされて、ジェームズとしても喜んで会つことにしたのだ。

「ほう、この子ですか・・・」

ルシアです、と言つて紹介されたその子にジェームズが会つてみれば、確かに顔には知性が宿つていた。

「ええ、頭脳だけならば、私をはるかに超えるでしょうね」

実際、イッサー・ラのお墨付き同然であるので、すぐにでも使用人として迎え入れたいと感じたのである。

ただ

「ただ、なぜそのような子を私どものところに連れてきてくださいましたのでしょうか?」

それだけがジエームズには不思議でならなかつた。

それほどまでに優秀であるならば、公爵家でも雇われることは可能であつたはずである。

アルイケ家は、7大公侯爵の中でも侯爵に叙任されたのがもつとも遅い。

先の大戦でのアルイケ伯ケアリーが挙げた数々の戦績によつて侯爵になつたのである。

ゆえに、声がかけられるとすれば最後のはずであつた。なにがあるのではないか、と疑うのも無理はない。

ジエームズのもつともな質問にイッサーラは少し逡巡した後、口を開く。

「ああ・・・それは、彼が」

ゆつくりと伸ばした手がルシアの頭から茶色のかつらをはぎ取ると、純粹な黒髪が表れた。

「クメール人の象徴を持つているからです」

黒髪を見たジエームズは、ああ、と得心が行つた様子でうなずく。黒髪はカルデア王国の人間にとつて、特に貴族にとつて避けたい色の一つであるからだ。

カルデア王国の成り立ちには、王国の南に位置する小さな国「神聖クメール帝国」が大きく関わつてゐる。

神聖クメール帝国はピレネー大陸で最も古い国の一つであり、クメール人を至上とする文化が息づいている国であつた。

カルデア王国の建国の祖であるルツヤン＝アブネル＝ダ・イジューは純粹カルデア人と呼ばれる人種であり、神聖クメール帝国内でかなりの迫害を受けていた。

ルツヤンはカルデア人を含め北東に住むイシュマイカ人やトリニア人が迫害を受けることに我慢ならなくなり、少数のクメール人を巻き込んで帝国に対して反乱を起こした。

結果、独立は成り、今ではピレネー大陸第2の国なるまでになったわけだが、その歴史ゆえにクメール人とその他の民族とには深い溝がある。

もちろん、少数とはいえた帝国のやり方に嫌気が差したクメール人も反乱に参加していたわけで、表だって嫌われているわけではない。だが、深層心理にはクメール人に対する嫌忌の念があるので、クメール人の特徴たる黒髪は歓迎されないのである。

「なるほど、それで、先生はどこにも出さずにおかれたのですね」「ええ。・・・ですが、先ほども申し上げた通り、彼はかなり優秀ですから私としては信頼できるところで働かせたいと思っています。そしてジェームズ。君は、血統主義の側面も持っていますが、能力を正当に評価できるところを私は高く買っています」

イッサー ラの述べるとおり、ジェームズは人種としての血にこだわることころがあつたが、それでもそれだけで爪弾きにするような狭量な男ではなかつた。

「先生に評価していただいているとは光榮ですね。・・・しかし、邸内にはそれにこだわる者もあります。具体的な能力などをお聞かせいただけだと楽なのですが」

ジェームズの当然の要求にイッサー ラはどこか楽しげに口を開く。まるで、今から手品の種明かしをする奇術師のように、意味深な笑みを浮かべた。

「ルシアが、わが孤児院の図書を読破したのは10才の時のことです。その中には、私のすべての著書が含まれます」

「先生の・・・? それは、本当ですか?」

思わず、といった調子でジェームズは聞き返した。

イッサー ラは識者とされているだけあって、その著書は100を超えるとも言われている。

それだけではなく、彼が書き表わした本はすべて貴族高等教育のおりに使われるものであつて、英才教育も受けていない孤児に理解で

きるはずもない。もし、イッサー・ラが述べることが本当ならば大天才児と呼んでも差し支えはない。

「ええ、読むだけではなく、完べきな理解も伴っています。どの本のどのページのどの行を指定しても諳んじることができ、それに解釈を加えることもできますよ。試してみてはいかがですか？」

驚くジェームズをイッサー・ラは挑発してみせた。

ジェームズもそこまで言われて引くわけにもいかず、生徒の時を思い出しながら全力で問題を出す。

「『王権の基盤』。王権の始まりについて、24ページ第1行目より暗唱の後、現王権への解釈を加えよ」

「『王権が与えられることになるのは以下の3つに大別できる。1、自然発生的に指導者を求めた者たちの後押しにより与えられ場合。まとまりを求めるのは人間の常であり、この場合争いは生じない。2、人間が欲望により権力を求め、なんらかの方法により他を圧倒する場合。多くの場合、武力による解決が最も多く、その王権自体は既に確立されている。3、同じ目的をもつ者同士が寄り集まり、その目的を達成した後、同士の中で決められた指導者がそのまま王権をもつようになる場合。』現王権は、コルベール暦1年、神聖クメール帝国の用いる年代記によればクメール暦895年。ルツヤン・アブネル・ダ・イジューが帝国の殘忍な人種政策に反旗を翻したことになります。彼の反乱には、多くの民族が協調したことでは達成されました。よって、先に述べた3つにより分類するとすれば、?に当てはまることになります。ただし、革命達成の後、内紛により王位は決定しましたから、?の性質も包含すると思われ、結論としてまとめると、『カルデア王国の王権は、帝国からの独立という共通の目的をもつた者たちにより革命が成功によるが、同士のうちほとんどの者が権力を欲し、武力によつてルツヤン初代国王が王位に就いたことに始まる』となります。以上、解釈終わり」

圧倒的なルシアの返答に、ただ茫然とジェームズは聞くことしかできなかつた。

王国の成り立ちを正確に述べて見せたこともそうだが、現王権の始まりを『欲望』をも含むと正々堂々非難していせたことに驚いていたのだ。

王国内では、ルツヤンは英雄として奉られており彼を悪く言つ者など一人もいない。

ルツヤンは当然うけるべき王権をその手に確立するために戦つた、とされており、悪者になるのはいつも彼以外の革命者である。

「驚いたな・・・先生、これは先生の教えですか？」

言外に、「これは謀反に近いですよ」と匂わせながらジエームズはイッサー ラに問う。

だが、イッサー ラの方でもルシアの回答に呆れたように笑い「いや、ある日書庫から出てきたと思つたらこうなつっていたのです」と言つにとどけた。

これは、拾いものかもしれないー

ジエームズは胸が高鳴るのが分かつた。

ルシアが自分でその考えに至つたといふことは、革命家としての素質があるかもしないと考へたためである。

「君は、・・・ルシアは、もしも王権にふさわしくない者がいたらどうするのが最善と考える？」

「挿げ替えるのが最善かと」

ルシアの端的かつ苛烈な質問に、ジエームズは笑いがこらえ切れなくなつた。

ああ、首を切つたことは正解だつたかもしれない

「先生、決めました。この子はアルイケ家で雇います」

宣言したジエームズにホッとした様子でイッサー ラは息を吐いた。

「ああ、それは良かつた。私も一安心というものです。・・・ジエームズ、どうかよろしくお願ひしますね」

「もちろんです、御安心ください」

イッサー・ラの横で小さく頭を下げたルシアの方に目をやりつつ、ジエームズは胸を張つたのである。

その日から、ルシアはアルイケ家の執事補佐として働くことになり、期待を背かぬ働き手として屋敷内の者からの称賛を一身に受けるようになつたのだが

「ルシア・・・なぜ、お前はその様に笑うのだ・・・!?」
目の前にいる、金髪にオッドアイを宿した「ルシア」をジエームズは見つめながら吐き出す。
なにが、なぜ、どうして、いつなつたのか。ジエームズには検討もつかなかつた。

誇りと傲慢 前篇（後書き）

変装つてそんなにすごいのか？とか、ジエームズつて目が悪いのか？とかそんな突つ込みはなしの方向でお願いします。スパイ大作戦なみにすごいのですよ・・・（わかるかな・・・スパイ大作戦・・・）

誇りと傲慢 後篇（前書き）

まさかの、2日開けでの投稿です。

（この前書き、パブリック向けでいいのだらつか・・・・と思いつが
気にしてない）

誤字脱字とか見つけるたびにへこんでいますが、それでも絶賛募集
中です。

よろしくお願いします。

絶句に近いジョーモズを全く気にせず、フォンビレートは「閣下」呼びかけた。

静かで、いたさかの尊敬の念も含まぬ物言いには、「聞け……」と命じているような迫力さえある。

「御存じでしょうが、私は、貧民街の生まれです。そのため、イッサーラ先生には大変お世話になつたものです」

フォンビレートは、彼の言うとおり貧民街、正確にいえば王都の片隅のピヨードルフ地区の生まれであった。1526年に生まれたことになっている。貧民街とつけられるだけあって、住民は孤児か、職にあぶれてしまい明日の糧にさえ事欠く者たちだけであり、フォンビレートもまた孤児であった。

彼は、その出自ゆえに、今回の立ち回りに当たり1000人の男を雇うことにも成功した。適度な信頼と圧倒的優位でつきつける契約が最も効果的であることを、彼は身をもって知っている。

「・・・ごみ溜めが・・・！」

自分と並ぶべくもない下等な者たちが、フォンビレートのアドバンテージとなつて今回の策略を阻んだことに気付いたジョーモズは精一杯の侮蔑を投げつける。それも、自分の敬愛するイッサーラさえ反対の立場であつたことに気付いたのだから、心中は揺れに揺れていた。

「閣下。ルシアは私であり、私はフォンビレートであり、フォンビルートはルシアなのです。」

その言葉にジョーモズは身を震わせ、それから大きく息を吐きだした。

観念したように眼を閉じ、

「イッサー・ラ先生は・・・・私を裏切ったのか・・・・」
と言いながら、椅子にクタリと座り込んだ。

周りの部下たちも急転直下の進展についてゆけず、ある者は呆然と虚空を見上げ、わずかながらに理解の追いついた者たちはこれからを思つて自分を保てなくなつている。

その沈殿した空氣をフォンビレートはあっさりと断ちきつた。

「閣下がこれまでにお話になつた策謀の数々は、ルシアが余すところなく聞いております。引いては私が把握しているということであり、閣下は國家に対し言い開きを求められております」

「・・・・・」

「これより、王宮殿に連行いたします。言い開きは王の前でされる」とよいでしよう」

ひとまず宣言したフォンビレートは、一度ジエームズから皿を切り、取り囲んでいる男たちをグルリと首を回して見やつた。

「それから・・・ここにいらっしゃる全ての皆様も証人、あるいは被告として王宮殿への出廷を求められるでしょう。今日、この場においては任意ですので、『自由に選択されるとよい』

王国法にのつとつて、フォンビレートは宣託をおこなつた。

彼の言葉を意訳するとすれば『自分で死ぬも良し。主を売つて自分の保身に走るも良し』ということになり、国家反逆罪の容疑者に対して実に寛大な処置をとつていることになる。

もつとも、彼がやさしさで行つてゐるわけがないことは明白だが、それでも田の前にぶら下げられれば、すぐる価値は充分にある提案だつた。必死に固まる思考を動かし、彼らは心の中で後者を選ぶことにする。

その気配を読み取つたフォンビレートはさわやかに後方を振り返り、指示を出した。

「連行」

その言葉を合図に、扉からは王国騎士団が姿を表し部屋の中にいた

者たちを次々と拘束しては出ていく。

4、5分の後、部屋の中には王国騎士団団長と首謀者たるジェームズ、それに王位代理人のフォンビレートの他はいなくなり、部屋の外にも見張りの兵が2名いるばかりである。

屋敷内では混乱が生じていたが、扉一枚隔てた執務室の中は、これまでの喧騒がうそのように静まり返っていた。

「閣下」

静寂を静寂のままにして、フォンビレートはジェームズに声をかける。

そこには、断罪者としてではなく主に対するような念が含まれていた。

まともな裁きを受ければ、二度と個人的に相対する機会はない。ジェームズが潔白で無い限り彼は罪人であるし、仮に潔白なら冤罪をかけた張本人としてフォンビレートが罪に問われるからだ。だから、フォンビレートは最後に、個人として話しかけた。

「あなたは優れた為政者です。忌み色を宿した子供を懐に入れる度胸も、それに対する不満を抑えつける力もお持ちだった。それだけではない、あなたの内政における能力は群を抜いていらっしゃる。実際、あなたの領地は王国内で類をみないほど潤っています」

10年に1度程の割合で、王国は飢饉に見舞われる。

昨年は、カルデア王国北東部のほとんどの領地で不作の年を迎えていた。

加えて、北東部の寒さは厳しい。各領地は本当に危機的な状況であった。

王家の飛び地があるビテロム領は、王家の支援もあり、また北東部内では比較的穏やかな気候であるためそこまで影響はなかつた。だが、アルイケ領は庇護下にもない中で、領地内にただの1つも不作の畑がなかつたのである。

ジェームズが数年前から推し進めていた農地改革のおかげであつた。

「それほどに優秀でありながら……なぜ、王位をねらつたのですか？」

1年に満たないとはいえ、ルシアあらためフォンビレートから見たジェームズは、ある意味で理想の主人であった。

能力はきちんと評価するし、それでいて王国への愛もある。優れた人材が、野心のために失われるのが残念でならなかつた。

「なぜ……か。……」

ジェームズは遠くを見つめたまま、呟く。

「ルシア……貴様の言うとおり、王位は王のものなのだ。多くの民族がより集まつて出来たこの国には、立場でも権威でもなく、その力で君臨する王が必要なのだ。その点、シシリアはあまりにも脆弱だ。……あの女は、人を懷に入れる。懷に入れた者を全力で守ろうとする」

お前もよく知つていいだろう?と笑う。

「それは、人として好ましい。だが……王としては失格だ」

そうして、語氣鋭くフォンビレートを睨んだ。

「それでは、国民は守れない。国を向上できない。……民は今この瞬間にも生きているのだ。王が民全員とお友達になるまでに死にかねないのだよ」

そんな王を排除しようとして何が悪い

そう続けるジェームズの雰囲気が部屋全体を飲み込んで、身じろぎひとつ許そとはしなかつた。

団長も呑まれて、足に根が生えたようにその場に立ち尽くしている。「ルシア」と、ジェームズは呼ぶ。

「それでもあの女についていくのか?」

それは、ジェームズがフォンビレートの能力を信頼し、彼さえればこの状況からでも逆転できるという確信を表していた。

「私と一緒に来い。……お前の能力は世界を変える。……あの女はお前の力を無意味に浪費して死んでいくだけだ」

時間さえ止まつたかのように錯覚する圧力は、カリスマ性を備えた

支配者としての彼の魅力を存分に沸き立たせていた。

だが

フォンビレートはフツとひとつ息を吐いて、懐から書状を取りだし、読み上げる。

「ジョームス＝ダイナン＝ダ・アルイケ侯爵。罪状、国家反逆罪。女王殺害を企てた罪で貴様を拘束する。反論は、法廷にて行え」

そのよどみない動作に、ジョームズは怒り狂つて、フォンビレートを問い詰めた。

「・・・私が、出来ないとでもいうのか！？ルシア」

「いいえ、出来るでしょうね。まず間違いなく」

「シシリ亞に出来ると思っているのか！？」

「いいえ、今のままでは無理でしょうね」

対して、フォンビレートは冷静に答える。

「では、なぜだ？ルシア。・・・ルシア、私について来い！」

命令張りに放たれた威圧感のある言葉に、フォンビレートはもう捉われなかつた。

『「閣下。ルシアなど存在いたしません。私は、フォンビレート＝メイリー＝ダ・エルバルト。シシリ亞＝マイア＝ド・イジュールに仕える執事です。主を傷つける者がだれであろうと、私は許すことはありません」

「閣下。足りないことは足りない今まで終わることの証明にはなりません」

「あなたの懸念は正しくとも、あなたの理想は正しくとも、あなたのやり方は正しくないのでです』』

丁寧に、徹底的にフォンビレートは批判した。

「過程にこだわっていては、大義は成就できません！？」

ジョームズが手負いの獣のように咆哮する。

「では、それまでの人間だということです」

「…………な、に?」

「正直に認められるだけの力がない、ということ。そのための有能な部下があなたを慕わなかつたところ」と。どちらも、あなたの嫌いな無能の特徴です」

「…………」

ジョーモズがルシアを心酔せることができるなかつた時点で、ジョーモズの負けは決まつていたのだ。

それを、體にまで刻み込ませるよつとフォンビレートは言ひ聞かせた。

それは、これまでのどんな言葉よりも、ジョーモズを打ち碎いた。自分の信じていたものが、自分を締め付けたのだから当然かもしれない。

言葉がなくなつたことを確認して、フォンビレートは廊下の兵士に連行を命じた。

出ていく背中に、最小限に頭を下げる。

それは、ジョーモズの能力を惜しむ気持と、これまで国政を担つてきた男への最大限の礼節をもつた仕草だつた。

パタンと音がして、扉が閉まる。

それと同時に、フォンビレートは騎士団長のほうを振り返つた。

「あなたの忠節を陛下に」報告申し上げることを約束します……

ソーア＝ラルフ＝ダ・アルイケ閣下」

その言葉を受けて、ソーアは兜を脱いだ。

「父に弁舌の機会を『えてください』たことを感謝いたします
深々と頭を下げる。

「いえ。……親子の別れは無言のうちに去つものではありません
から」

「それでもです。私が直接捕らえないでようよつとしてくださったことも、侯爵位を継ぐことができるようにしてくださいました。感謝させてください」

傅こうじとするソーヴィをフォンビレートは押しつづめた。

「それは、陛下に。・・・報告につきあつてくださいますか？」

仕事を果たした者として、共に。と誘うフォンビレートにソーヴィは首肯し、一緒に歩き出す。

わずかに前を行くフォンビレートの頭頂部を見ながら、ソーヴィは数時間前のやり取りを思い出していた。

数時間前

「騎士団長、これから反逆者を逮捕しに行かなければならぬのですが、一緒にいかがですか？」

まるで、散歩にでも誘つよつような気軽さでフォンビレートは騎士屯所に入ってきたのだ。

そのあまりに軽い誘いに、ソーヴィの周りは剣呑になつた。

騎士団長は軽々しく動くべきではないし、たかが逮捕に出向く」とはあり得ない。

だが、フォンビレートはそんな様子など目に入つていなかのようソーヴィにお願いした。

「いや、これは命の危険があるのです。女王陛下の将来にもかかるります。・・・どうにかついてきていただくことはできないでしょうか？」「

王宮内でも際立つた才能で有名な男の頼みを断ることもできず、ソーヴィは請われるままについてきたのだ。

向かう先が、王都内にあるアルイケ侯の屋敷 つまりは自分の実家であつたことも、逮捕されるのが自分の父親であることも知らなかつた。

だから、それが分かつた時、ソーヴィは頭が真っ白になつて怒りのままにフォンビレートを詰つた。

その詰問に対し、フォンビレートはどこまでも冷静だった。

「私が間違いを犯しているかどうか確かめてはいかがですか？」

「・・間違いだつたら…！」

「その時は私を中傷の罪で逮捕するか、殺せばよいのです。」

「・・・・・」

些かも淀みのないフォンビレートの口調にソーアの頭は急速に冷えていった。

「よく見極めてください。よく考えてください」

「あなたは何を愛し、何を優先し、何に頭を垂れるのか。王国ですか？王家ですか？国民ですか？家族ですか？栄光ですか？地位ですか？名誉ですか？自らですか？」

「・・・・あなたが、義に沿つて歩んでくださる』とを願います」

そうして、踏み込んだ屋敷内にて、父親の願いも主張も知ったソーアは選択した。

この春に誓つたままの忠誠を保つことを。
自分の信じるところに従つて歩むことを

「フォンビレート様。・・・・忠実な友であることを誓います」
彼は、新しく出来た自分の義を胸に抱いてフォンビレートの後をついてゆく。

「・・・・様をとつてくださると大変にありがたいですねえ」

聞かれぬように小さくつぶやいたはずなのに、地獄耳をもつ執事にはしつかり聞こえているようだった。

その願いにこたえて、ソーアはもう一度、ただ一個人として誓いの言葉を述べた。

「フォンビレート。ソーア＝ダ・アルイケの名において貴殿の忠実な友であることを生涯の誓いとする」

「ソーア。フォンビレート＝ダ・エルバルトの名において、その忠實に忠実を持つて返すことを誓う」

後に、この2人は理想の友情を育んだとして大陸中の羨望を受けることになるのだが、それはまた別のお話。

舞台裏（前書き）

いつもなぜか長くなってしまう。

（いつもという言葉を使うには投稿回数が少ないのは重々承知です
…突っ込まないで…）

また、1話から少しずつ修正を入れています。（伏線を書き忘れていたことに気づいたので）そちらをご確認なつてから続きをご覧になると分かりやすいかもしません。（せいぜい、1、2行程度の改正です）

どうしたらまとめられるのか悩みつつ、「感想・意見絶賛募集中です。よろしくお願いします。

「ただいま、戻りました。陛下」

フイラデルへ帰還した2人を出迎えたのは、シシリアただ一人であった。

フォンビレートが「ルシア」として敵中に潜入していたことは、だれにも知らせておらず、シシリアの独断で許可された作戦であったためだ。

もつとも、シシリアも全て知らされていたわけではなく、『ちょっと不穏な動きがあるので、潜入してもいいでしょうか?』と曖昧をさらにオブラーで包んだような漠然とした許可を求められただけである。実際、彼女は昨日の14刻まで何一つ知らないまま、フォンビレートに守られていたといつても過言ではない。昨年の春に既に狙われていたことも、潜入先がアルイケ侯だということも知らなかつた。フォンビレートに言わせればあまりにいっきいっきいのシシリアを気遣つたということになるらしいが、それって国主としてどうなのと自分で思わないでもない。だが、それで大抵は良い方向に行くのだし、と越権行為を咎めるつもりはなかつた。

こうしてその成果が出ているのであれば、やはり判断は間違つていないということだろう。

潜入中、フォンビレートは最もらしい理由をつけて数多くの計画を潰していたし、最終的にジエームズを追い込んだのも彼一人の力である。

フォンビレートもまた、自分がむちゃくちゃな事を行つたと自覚していた。シシリアからの絶大なる信頼がなければ、許可が下りるはずもないようなお願いであり、自分で振り返つてみてもどうしておられたか分からぬほどである。

だが、シシリアは当然のように許可を出したし、フォンビレートもまたその信頼に応えたのである。

そして今、そのすべての帰結を決定する権利はシシリアに委ねられていた。

昨日

全ての背後関係を説明した上で、「どうしましようか?」と尋ねたフォンビレートに「私が決裁する」とシシリアは答えた。フォンビレートは、「処断てきて」と言われようが、「滅ぼして」と言われようが應えられるだけの用意を整えていたが、主の願いを果たすために、ジェームズを法廷に引っ張り出だけの行動しかとらなかつた。今から行われるジェームズの審判にて女王の採決が行われ、処斷するというのがシシリア側が思い描いている青写真である。

「御苦労様、フォン・」

忠実に役割を果たしたフォンビレートを勞おつとしたシシリアの言葉は取つてつけたように続いた。

「・・・ビレート?」

一般的に言つて、使用人を親しげに渾名で呼ぶ主などほとんどないが、シシリアはそうしている。

が、彼の横にソーアイを認めたシシリアの語尾とつさに正式に呼んだのだが、あまりのわざとらしさに尻すぼみになつた。それも、疑問形になるおまけつきである。

一方、ソーアイの方も目を丸くして驚いていた。

当たり前のように繰り出されたそれは、国の最高権力者がこの執事に対していくかに愛情を抱いているかを示しており、それは彼がこれまでにしてきた貴族社会には存在するはずもないことであつた。信頼すれど親愛は生まれない。それが貴族ひいては政治の世界であ

る。

彼が驚きのあまり思考を停止したとしても無理はない。

「なぜ疑問形になるかはともかくとして、ひとまず」報告申し上げたいのですが、よろしいでしょうか?」

そのなんともいえない空間をいち早く立て直したのは、やはりとうべきかフォンビレーントであった。

ソーアイが取り繕えなかつたことも、シシリアが周りを確認しなかつたことにも、好意と憂慮を同時に抱いたがそれをちらりとも匂わせずすくべきじとを指摘する。

「・・・ええ、いいわ。執務室にいらっしゃい」

シシリアもまたソーアイの思わず登場に驚いていたが、フォンビレートが彼を警戒していないことに気が付き、すぐに態勢を立て直した。踵を返し、先頭を歩いて私室に戻る。

そのすぐ後にフォンビレーントが付いていくことに気がづいて、ソーアイも慌てて後を追つた。

「なあ

「はい?」

ソーアイが小声でフォンビレーントに声をかけると、彼はちらつとも視線を向けないまま返事をした。

「いつもなのか?・・・その・・・フォン?って言われているのは

「ええ、拾われた時からずっと。名を『えてくださったのも陛下ですから」

「・・・・ああ、だらうな。・・・貴族でもないのに神聖^{セカンドネーム}名も名字

も持つているなど不自然とは思つていただが・・・まさか、下賜されていたとはな・・・」

カルデア王国において名前が全てを表しており、身分を推測するの

は簡単である。

名＝神聖名＝性別・名字のように構成されている。名字を持つことが赦されているのは貴族と王族だけであり、苗字＝偉い人という図式が成り立つ。一方、神聖名とは神官が神託を受けて名付けるものだというのが建前があり、寄付という名の代金を払えばだれでも付けてもらえることができるるので、富裕層であれば平民でも持つている。また、身分に關係なく性別を表わすダ（男子）もしくはド（女子）はつけることになっているため、もし、フォンビレートが一般的な名付けで行われるとするならば「ダ・フォンビレート」となる。「拾われてすぐに与えられたから、別段なんとも思いませんでしたが、分かるようになつた時はさすがに責めましたよ？」

ソーアの言葉に、フォンビレートも昔を思い出した。

シシリアは本当に面白い主人で、拾つてきたフォンビレートにフルネームをつけるばかりか、教育を受けさせていた。使用者として拾つた後も引き続きイッサー＝ラの孤児院に通わせ、その書庫で過ごす時間を大いに取つたのである。王国最高の教育を一使用人に行つたのと同じであった。

結果、莫大な知識と知恵を合わせもつようになり、史上最年少で王家筆頭執事まで上り詰めたわけだが、フォンビレートはそこに自分の才能よりもシシリアの寛大さが大きく影響していることを自覚している。そのことに気付いた時、フォンビレートはシシリアに生涯をささげることを決意したのだ。

「・・・君の忠誠心に僕は近づけるだらうか・・・」

ソーアはフォンビレートの話を聞きながら自嘲氣味につぶやいた。彼の父がそうであったように、道を間違えてしまう可能性などいくらもある。正しいことをしたいと願つっていても正しいことができるとは限らない。

「ソーア。あなたは、私と同じようにならないがいいでしょう」「えつ？」

「私は私の忠誠心が筆頭執事の持つべき忠誠心とはかけ離れていることを知っています。・・・正直に申し上げて、私はシシリア様が

ただ幸福であればいいと思うような盲目的な人間です。國として正しいかなど微塵も考えてはいません。・・・だから、あなたはあなたの義の基準を持ちそれに沿って行動してください。・・・仮に敵対するとしてもそれがあなたの正義のですから、恥じることも後ろめたさを感じることもないでしょう」

フォンビレートの言葉にソーアはハツとした。

そうだ、自分はあの時、父の屋敷に踏み込むときに『よく考えるよう』と言われなかつたか。

『「あなたは何を愛し、何を優先し、何に頭を垂れるのか。」』

「そうですね。でなければ、私はただの犬になつてしまつ」「犬という自虐的な言葉を使つたにも関わらず、ソーアは濁りのない瞳をフォンビレートに向けた。

「國家の安寧のために、全力を尽くす。それが、私の生き方であるようにします」

「で? 私をいつまで忘れているのかしら?」

男の友情を視線で交わし合つていた二人が、弾かれたように前を見ると、一行はすでに執務室の前に到着しており、シシリアがジト目でこちらを見つめていた。

「・・・はあ・・・・男の子つてどこでもこうなのかしら・・・・」
大きくため息をつくシシリアに、フォンビレートは彼にしてはとても珍しく動搖をあらわにして、

「も、申し訳ありません。決して忘れていたわけではないのですが・
・・その、陛下の・・」

と必死に言い訳をしようとしている。

シシリアはその様子に先ほど感じていたわずかな嫉妬も忘れてフフツと笑つた。

いつでもシシリアしか見えていなかつたフォンビレートが、我を忘れるほどに信頼した友情を築き、それでもシシリアに全力を尽くそ

うとするその姿が愛おしかった。

「いいわ、あなたのそんな姿久しぶりに見たしね・・・ま、報告をこちら向きでやってくれれば問題ないわよ。ソーアさんもね」
フォンビレートが開けた扉を通りながらシシリヤにチクリと刺され、二人とも撃沈したのは言つまでもない。

「さて、事の顛末と何を出し、何を明らかにしていないか報告して

頂戴

「はつ」

二人揃つて、雰囲気が鋭くなる。

なんだか、この二人つてお似合いね。などという全く関係のないことを頭の片隅で考えながら、シシリヤも姿勢を正した。

「まず、私の出した情報ですが、必要最低限しか出していません。というのも、ルシアの名を出した時点で侯爵は全てを悟り、みつともなく抵抗するような真似はしなかつたからです」

「全部話して」

「はつ。まず、我々はアルイケ侯が全ての使用人を呼び寄せるまで屋敷を取り囲んだまま待機していました。その後、ルシアが呼ばれたことにより全ての準備が完了したことが知れましたので、フォンビレートの手引により屋敷内に進入しました」

「進入にあたり、騎士団は5分遅れて入つてくることを申しつけ、執事に『陛下の使いである』と宣言し、部屋に取り次ぐようお願いました」

「・・・その執事はあなたがルシアだとは分からなかつたの?」

「いえ、何となく感づいたようでござります。ジェームズに取り次ぐ際、『お見えのようです』と述べていましたから疑念は抱いていたのでしょうか」

まだ罪は確定していないが、罪を認めているため内輪の中で敬称を

取り扱つて『ジェームズ』と呼ばれることにソーアは心が痛むのを感じたが、そのまま報告を続けた。

「その時、「フォンビレートか?」と呼び捨てにするほど私の存在に慌てた後、侯爵の権限を利用して部屋に閉じこもろうとしましたので、執事を無視して部屋に入りました」

「・・・筆頭執事を呼び捨てにするなんて、とても焦つたのね・・・」

王家の筆頭執事は『影の執政官』であるので、たかが一使用人にも関わらず『様』をつけるのが慣例になっている。筆頭執事の及ぼす影響をよく知つてゐる貴族ならば、たとえ心の中で侮蔑していてもきちんと『様』をつける。それすらも忘れるほど、ジェームズは焦つていたのだ。

「侯爵の権限の発動をしようとしたようですが、私の姿を見たことで途切れてしまったので、正当に室内に入ることができました」貴族に与えられている特権の一つに、『私室』に何人たりとも許可なく立ち入つてはならず、その中で行われた話も罪に問われないというものがある。

これはつまり私室、その者の所有する屋敷の中であればどこでも行われた話は国家転覆計画であつてもそれだけでは罪に問われることはない、ということである。もしそれを実行に移したとしても私室で行われた話は証言として採用されることはあつても証拠とはならないのだ。10人以上の前での話なら「公の宣言」と認められ罪にもなるし、証拠としての採用も認められる。ただ、それには10人以上が「聞いた」という証言が必要となるため、あまり意味はない。

今回の場合も同じであり、執務室の中は特にその権限が保障されているためジェームズが「入るな!!」と命じて権限を発動すれば、フォンビレートも騎士団も部屋に入れなかつただろう。

「私がルシアであることに気付いたジェームズは、私がこの計画を聞いたことを悟り、自供に至つたというわけです。もっとも罪を認

めた上で、私を勧誘してきましたが

「そう・・・ところで、ルシアが聞いた話は証拠能力を持つている
?それとも、証言にしかならない?」

フォンビレートの暴露したジェームズの勧誘の話には一切反応せず
に、シシリアは話を進めた。

そこに、信頼というものを見せつけられた気がしてフォンビレート
も、それからソールも苦笑をわずかに広げて、再び報告に入った。

「端的に申し上げて、私がルシアとして聞いた話は証拠として採用
するには至らないでしょ?」

フォンビレートはルシアが聞いた話を証拠とすることが困難である
との見解を示した。

道すがらに概要を聽いているソーアイもそれに同調した。

「自分も同じように考えます。貴族特権を最大限に利用するでしょ
う。それをされれば証拠とすることは難しいと考えます。むしろ、
この証拠を法廷に持ち込むことはこちらを不利にすることにつなが
るかも知れません」

フォンビレートとしては、これほど長く潜入するつもりはなかつた
のだ。

どこか、適当な時に外で上手く誘導尋問でもすればよい、と考えて
いた。もし、一步でも外で話すなら罪に問うことは十分可能である
から、「主を危険にさらす前に」とさえ考えていたのだ。

だが、ジョームズはやはり百戦錬磨と言おうか、フォンビレートの
思惑の通りになど動いてはくれず、特権の及ばぬところでそう言つ
た話をするなど一度もないままだったのだ。

10人以上の前で話したこともあるが、彼らがそれを証言するとは
思えない。逮捕の場にいた者たちも、法廷に立たせることはできる
が、冷静になれば素直に証言しないと思われる。何人かは保身に走
るかも知れないが。

シシリア側が手札として法廷で使えるものは実に少ない。

ジョームズがここまで連行されたのだって、ルシアショックとでも言つべき意表を突いたことによるものである。あの場で切り捨てることが可能だつたからと言つて、法廷で有罪に持ち込めるとは限らない。

あの場であれば、フォンビレートに心を折られたまま死んでいったんだろうが、こう時間がたつては向こうも立て直してきているはずだつた。

「・・・・そう、なかなかうまくいかないわね」

これから、裁判に向かうはずの一行は深く考え込む。強引に有罪に持ち込むこともできようが、それでは貴族たちは黙つてはいられないだろ？

カルデア王国は、独裁国家から独立したという歴史を持っているため、「法治國家」を標榜している。

王といえど、法の前では平等であり、これほどの大物の裁判に鶴の一聲を利かせることができるとは考えにくい。

そのまま10分ほど時間が過ぎたとき、シシリアはふと別の可能性に行き当たつた。

ずっと、ジョームズの計画遂行したことを証明することを考えていたが、こちらの方が容易いのではないかという事実を思い出したのだ。

「ねえ・・・事の始まりは、王国法第1条に細則が付け加えられたことによるのよね？」

「・・・ええ、そうなります。確認は取れていませんが」確認するためには、大公侯爵から鍵を借りねばならず、こちらの動きを知らせることになるのでそれが出来ていない。

「でも、それって変よ？」

そもそもの前提に対して疑問を提起するシシリアにフォンビレートもソーアも怪訝な顔になつた。

「いつ、書き加えられたのかしら？」

「…………そうか！…………そうです。鍵の不正使用が行われたに違います！」

シシリアの言葉に、ひらめくものがあったフォンビレートが興奮気味に語る。

「お、おい、どうにしたことだ？」

私にもわかるように説明してくれ、と言つソーアイにフォンビレートはすぐに説明する。

「先ほど、御説明したように王国法第1条に細則が付け加えられたことが事の発端です」

「ああ・・・私の父も含めた7大公侯爵で『第1子の男子の家系が』という文言を付け加えたことか」

「ええ、そうです。それは御前会議を経て、採決に至りました。採決が行われたのは、一昨年の冬、最速でも1542年12月29日になります」

当時、王太子であったカイルが亡くなったのは1542年12月19日。王族が亡くなると、喪に服する期間が1週間取られる。つまり、1542年12月26日まで国全体は一切の仕事が止まっていた。また、近親者はさらに2日休むことになっているため、ヘンリルが会議に出席できたのは、1542年12月29日ということになる。

「・・・・なるほど、そうだ」

ソーアイも指折り数えて、記憶を手繕りその推測を支持した。

「実際に原本に書き加えることができるのは、半年後。となれば、1543年6月28日以降ということになります」

「ふむ・・・・となるだろうな。・・・・王位篡奪を狙うならば、早急に・・・」

フォンビレートの説明に納得しながら聞いていたソーアイに脳裏にもひらめくものがあった。

「そうか！――それを指摘すれば、強力な切り札だ！――・・・・とり

あえず、一度原本を確認しなければ・・・

「ええ、すぐに行います」

ソーアとフォンビレートはその可能性を最大限に広げるために話し合いをする。

シシリアは不謹慎かもしれないが、それが微笑ましく思えてこいつをりと笑いをもらした。

それからすぐに顔と気持ちを引き締める。

この裁判は、一貴族の裁判ではなく、國を誰がおさめているかをはつきりと示すことになるだろうから。

大丈夫、恐れることはない。私には、味方がいる。

シシリアはもう一度、自分を確認して二人に声をかけた。

「行くわよ。・・・共に闘いなさい」

「「御意」」

舞台裏（後書き）

はい？を筆頭に、だいたい杉下右京口調がイメージです・・・

法廷は離る 前篇（前書き）

やつと法廷シーンです。（いや、だれも”やつと”なんて思っていなないとしますが・・・）

長くなつたので2つに分けています。

引き続か、「意見・」感想をお待ちしておりますので、よろしくお願いします。

王宮殿の大広間は、ざわめきと得体の知れない何かが満ちていた。シシリアは即位して僅かしか経っていない。

そこに、この騒動である。早馬によつて全貴族が集められており、物見遊山気分の者もいれば、王位に対する不信感を隠し持つている者もいる。

いずれにせよ、高い注目があることは間違いない。

「これより、ジェームズ＝ダイナン＝ダ・アルイケ侯爵位の裁判を執り行う！－被告人は入場せよ！－」

法務大臣の声とともに広間後方の扉が開き、騎士に付き添われる形でジェームズが入ってくる。

侯爵であるため、拘束されとはいひないが、それでも國の7大公侯爵の1人が被告であるという事実に、今一度広間はざわめく。

ジェームズはそのまま広間中央の椅子に腰かけた。

「訴状提出者、ファー＝ガーソン王立騎士団団長・ソーア＝ラルフ＝ダ・アルイケ。共同提出者、フォンビレート＝メイリー＝ダ・エルバルト 入場！」

誰が敵で誰が味方かという基本的な情報が不足しているため、訴状提出者すなわち原告は、シシリア・フォンビレート・ソーアの3人に絞られた。シシリアは裁定者でなければならないので原告にはなれない。必然的に2人のどちらかということになつた。フォンビレートは「自分が行く」と言つたが、ソーアは「息子たる自分の責任である」と言つて譲らず、結局それで落ち着いた。

原告が読み上げられた瞬間、ジェームズの閉じられた瞼がピクリと反応したが、それっきり取り乱すようなそぶりはない。むしろ、ソーアの方が無表情の中にも、痛みを感じているようであった。

一方觀衆は、ソーアの登場により、自分たちが聞き及んでいる噂が本当であるかもしれない、という思いを強くした。家長制度が今でも根強く残るこの国において、家族内で闘うということに覺悟のほどを推し量ることができる。

「罪状、國家反逆罪。・・・双方ともに、証人を隨時喚問する権利を有していることを確認する」

「「はっ」

2人ともはつきりとした答えを返す。

良く似た声が、二人が血縁者であることをより一層際立たせていた。「証人となつた者は、偽りを述べず、ただあるがままを述べることを命ずる。偽証を行つた場合は、その者が罪を問われることを覚悟せよ」

証人に対する注意に、広間にいた多くの者、特にアルイケ家にいた者は血の気が引いている。

「・・・裁判者、第28代国王・シシリア＝マイアード・イジユール 入場」

前方の扉が開けられると同時に、全員が起立して最高権力者を迎えた。

シシリアの白い肌と赤い髪が、窓からこぼれる光に反射して、権力者としてのオーラを増幅させる。

玉座で向き直り

「座れ」

と一言発し、黒い瞳が静かに閉じられた。

気持ちを落ち着けるように、2・3回浅い呼吸を繰り返したのち、再び開かれる。

「始めよ」

その言葉を合図に、法廷は始まった。

「原告者は訴えを」

「はつ」

法務大臣に促されてソーアイが一步前に出、訴状を読み上げる。すでに、噂として王都中を駆け巡っているため、一切の情報を持たない者など誰もいない。

それでも、彼が昨年の春からシシリアを狙っていたというくだりには、多くの者が驚愕の顔を浮かべていた。注意深く観察すれば、それは子爵や男爵など下級貴族であつて、大公侯爵は誰も感情をあらわにしていないことが分かる。

「・・・・よつて、アルイケ侯爵を国家反逆罪に問つことが妥当であると考えます。以上」

ソーアイの訴えは、20分ほどで終了した。

次はアルイケ侯爵の弁明である。

「アルイケ侯爵ジェームズ。反論はあるか？」

大臣の言葉に、ジェームズは眼を開きまつすぐにシシリアを見つめる。

一呼吸おいて、迷いのない動作で立ち上り、

「陛下、私の弁明を最後までお聞きくださいますように。決して、私の口を亡き者にはしないでください」と憐みを請つた。

その態度に、アルイケ侯爵が騎士の精神にのつとり肯定するだらうと考えていた人々が揺れる。

もしかしたら、彼は誤解によつてこの場にいるかもしれない

その間を利用して、ジェームズは攻勢に打つて出た。

「私は、確かにヘンリル陛下を敬愛し、この方を生涯の君主として定める、と常々憚りなく申しておりました。ですから、シシリア陛下に対する尊敬の念が足りないといわれても仕方のないことであると自覚しております。亡くなられてから今まで、私の思いはまだ解き放たれてはいいからです」

「ですが、それがシシリア陛下に対する憎悪の念に発展することな

どあるとお思いでしようか？」

広間を360度まんべんなく見渡し、自分のペースに引き込む。

「ありえません。私は、国を司る方としてこの方のほかにおらぬと思つております。それが、前陸下への忠誠心に、今、及ばないとしても、いずれこの方に心酔してしまつであらう」とは、周知の事実なのです」

執務室でのフォンビレートへ語つた言葉を「ヒーリング」と翻し、ジエームズは一世一代の演説を行つてゐる。

それが分かつたフォンビレートは内心で幾度となく舌打ちをした。ジエームズはシリリアをこれでもかと褒めそやすことで、自分がそんな大それたことは考へてはいないということ、それほどまでに評価している人間から信頼されなかつた哀れな人間であるということを周囲にアピールしているのだ。さすがは、侯爵。というところである。

「ああ、それなのに私が疑われるとは・・・・・!?

涙を流し、シシリ亞を見つめ訴えるジエームズは忠義の士と呼んでも差し支えがないほどに堂に入つてゐる。それを恥じる仕草が一層の真実味を持たせている。

「陛下、信じてください。確かに、私は息子に対して、あなたが即位して間もないころ不満をこぼしたこともあります。使用人に対してもよもやあつたかもしません。・・・ですが、それは国を憂える気持ちがあまりに先走つたせいなのです。王家の人々が立て続けに亡くなつていくその現状が、私の至らなさへの苛立ちが、不完全な私の口を滑らせたのです。・・・ですから、陛下。そのことに関しての処罰ならば喜んで受けましょう。私は忠誠心をもつ者と呼ばれるには値しないからです。ですが・・・ですが、この訴えはあまりにひどい」

ソーアの方にちらりと視線を送り、息子の方によろけながら一步近づく。

「私がこのようなことをする動機があるとでも言つのでしょうか?・

・・・私がこのよつなことをすることによって何か良いものを得る
とでも言つのでしょうか？・・・私はそれほどまでに愚かな人間
であるとでも言つのでしょうか？・・・私は・・・私は、陛下の僕
でいざります！――

絶叫が広間に響き渡る。普段、国政を担う者として存分に力をふる
つてゐる者が述べるそれは、抜群の威力でもって広間を支配してい
た。

「陛下。これだけは信じてください。私は王国の未来と王家の未来
とを繁栄させたいと願う一国民なのです。私自身は何も持たざる者
でいざりますが、それでも尽力することを、父より爵位を継ぎし日
より心に誓つてまいりました。それに1点の曇りもないことを私は
陛下に申し開きいたします。私は、陛下を亡きものにしようなどと
はただの一度も、そうです、ただの一度も考えたことなどないので
す。・・・・・どうか、どうか・・・・・私に公平な裁きをお与え
くださいますよう」

ひざまづき、慈悲を請い求め、自分の至らなさを公衆の面前で暴露
するジョーモズの姿に涙を流す者までいた。

ソーアもまた、父のなりふり構わない演説に、眞実を知つていても
心にくるものがあつた。

ソーアはジョーモズが罪を告白した場に居合わせた。フォンビレー
トからジョーモズがした数々のことを論理的に説明されてもいる。
それでも、揺らぐのだ。

この人を信じたいという思いは、血がつながつてゐる限りにどうし
よつもないものかもしれない。

シシリアでさえ、寒々しさを感じながらもソーアに同情の念を持つ
てゐる様子であった。

法廷は今、完全にジョーモズによつて掌握されたも同然であつた。

「発言の許可を求めるます」
ただ一人を除いては。

法務大臣に一度、許可を求めてから、フォンビレートは一步前に出た。

「御立派な演説でした。」

明らかな侮蔑を含んだ分かりやすい挑発に、広間の人間は皆、フォンビレートへの反感をもつた。

王座で見ていたシシリアも内心は冷や汗をかいていた。これほどに挑発的な始まりをするということには、余程の勝算があるに違いないが、それでもすべてを敵に回すような発言である。ソーキもフォンビレートの言葉に不満げな顔をしている。広間はジェームズへの同情心で溢れかえっていた。

「結局、否認なさるのですか？なさらないのですか？アルイケ侯爵」
フォンビレートの冷たい問いに、皆我に返った。

「あなたがあつしゃつたのはすべて、あなたがどれほど国を愛し、ヘンリル陛下を愛し、シシリア陛下への愛も培えるだろう。ということであり、肝心の質問には何一つお答えいただいておりません」
ジェームズが行つたのはただの議論のすり替えである。

『暗殺計画をおこなつたか』という質問に対し『私には動機がない、私に私心はない』という動機の弁護を行つたのである。おこなつたかどうかに関しては一切触れていないのだ。むしろ、こんな私がそれをすると思いますか？ということで広間の人々に答えを求めていたことになる。

「お答えください。なさつたのですか？なさなかつたのですか？」
自分が取り込まれようとしていたことに気づき自失している周囲を置き去りにして、質問は繰り返される。シシリアに対する忠誠心が芯にあるフォンビレート以外は気づけないほどに、ジェームズの弁舌は見事だったのだ。

「・・・・しておるわけがなかろう……」

ジョームズは気付かれたことに恥々しさを感じながらも、はつきりと容疑を否認した。

「確かに、お聞きしました」

ジョームズの答えに、フォンビレートの瞳が輝く。彼がはつきりとした肯定を行つたことにより、一度と同じ戦法を行えなくなつたらだ。

「では、閣下。これより行います質問に、過不足なく、一切の偽りなくお答えくださいますようにお願ひ申し上げます」

言外に『（頭のいい）閣下。過不足なく（意図的な的外れな回答なく）お答えくださいますように』と言つたことを理解した周囲は表情を険しくして、フォンビレートの弁論に耳を傾けた。

法廷は踊る 後篇（前書き）

後篇です。

回収し忘れてないフラグがないかドキドキしています。
なにがあれば（曖昧ですみません・・・）御指摘いただければ幸い
です。

御感想などもあればよろしくお願ひします。

「まず、動機の点ですが、私共は一つの情報を掴んでおります。・・・それは、現時点でアルイケ侯ジェームズ閣下が、第1位王位継承者ではないか、つまり、王太子ではないかといふことです。これは、真実ですか？」

フォンビレートの言葉に下級貴族達が揺れ、ジェームズの言葉を固唾をのんで見守る。

「・・・そうだ」

既に鍵は回収されており、誤魔化しても無駄であることが分かつているので、ジョームズは素直に答えた。

「同じ質問をベラキア公爵、ランド公爵、トルクメニア公爵、ルーン侯爵、ガボン侯爵、サルダニト侯爵にお聞きします。アルイケ侯爵があつしゃつたことは事実ですか？」

今度は、6公侯爵に質問する。

突然、振られた公侯爵たちは自分たちに火の粉が飛んでくるかもしない気配を感じ取り、ひとまず素直に答えた。

「そうだ、御前会議にて決定したことを証しよう」

筆頭公爵・ベラキアが述べると、その他の公侯爵も右手を挙げて同意を表わした。

それを確認して、フォンビレートはベラキアの方に向き直り、さらに問う。

「それは、いつ頃のことか覚えておいでですか？」

「・・・・・一昨年の冬・・・だが?」

「正確にお願いします」

「・・・覚えておらん」

「そうですか・・・では、確かめてみましょ。この裁判に先立ち、皆さまからお借りした鍵と陛下にお借りした鍵で金庫を開けま

した。……ここに原本がいります。陛下にお渡しますので、お確かめいただきましょう

その言葉を聞いた公侯爵はフォンビレートが何をしようとしているかが分かり、慌てた。

「待て！！！それは、国防上の観点から秘匿されているものだ。衆目の面前でというのは・・・」

もつともらしい理由をつけて、やめさせようとする。

「そうだ！！そもそも、その鍵が一使用人の手にあるというのがおかしい！・・・私たちは、陛下が集めたいとおっしゃっているというので、貸したのだ。決して、一使用人に勝手をさせるためではない！」

「陛下も陛下です。いかに、王家筆頭執事といえど、原本を見る権限を与えるなど・・・」

フォンビレートが平民出身だといつても相まって、広間は再び逆風が吹く。

「日付を読み上げていただくだけです。・・・それに、筆頭執事が行つてはいけないなどという記載がどこにあるのでしょうか？・・・王国法第2条は『7本の鍵と国王の鍵がいる』と定めているだけであり、皆さんが預けられた鍵を陛下の命を受けて私がお借りし、金庫を開けることを妨げてはいません。」

膨大な王国法を全て記憶しているフォンビレートにしか出来ない芸当である。

「・・・それから、ベラキア公爵。先ほどの、『衆目の前では』といふのは、ここにいる皆さんが裏切る可能性があるとおっしゃっている、と解釈してもよろしいですか？」

広間の視線がベラキアへ集まる。

「ここにいらっしゃる皆様は、建国以来忠実に王国の発展を担つてこられた方々です。国防の観点とは、他国に対しても理解しておりましたが、公爵の中では、国内にも敵があらわれるとこいつことなのでしょうか？」

本音を言えば、フォンビレートも国内の方が敵が多いと思っているが、表だって、敵扱いするような愚かしい真似をする気にはなれなかつた。伯爵家以下、忠実に職務を全うしてきた者の方が多いのだ。それを、秘密を守る対象として言われたのでは、立つ瀬がない。そこを逆手に取つた。

「どうですか？」

「申し訳ない。・・・少し、言葉が過ぎたようだ」

「お座りください。いまだ、話は終わっておりません」

ベラキア公爵がやり込められたことで、広間はフォンビレートの中に入った。

「話を戻します。陛下、王国法の原本を確認いただけますでしょうか？」

シシリアによつていき、恭しく差しだす。

それを受け取つたシシリアは澄んだ声で読み上げた。

「王国法第1条、細則4。決議が行われた日付、コルベール暦15
42年12月29日。」

「ありがとうございます」

フォンビレートはシシリアへ頭を下げ、再び法廷に向き直つた。

「この細則が、御前会議にて話し合われ、決議に至つたのは一昨年の12月29日のことです。・・・当時の筆頭書記官はブルンジ伯でした。リシュメ閣下、これを書き加えられたのは閣下ですか？」
リシュメはブルンジ伯爵位を継ぐ前、筆頭書記官をしていた。昨年より伯爵位を継いでおり、このような法廷への出席は初めてのことである。急に振られたことに動搖して小さくなづくいた。
それを確認してから、フォンビレートは懐から一枚の紙を取り出した。

「ここにありますのは、ヘンリル前陛下の主治医であつたクーラ様の診断書です。一枚目の口付は、1543年4月28日。書状の内容はこうです。『ヘンリル陛下は、本日お眠り深く、起き上がる御

様子はない。意思の疎通は困難である』『この日より、同じ記述が続きます。そして2枚目の日付は、1543年6月28日のものです。同じにも、同じような記述があります。『陛下は、瞳を開けられることも少なくなり、意思の疎通は途絶えたように見て取れる』とありますから、さらに容体が悪くなっていることが分かります。この日以降も、お亡くなりった1-2月4日まで回復したという記述は見当たりません。』

ヘンリルを慕つていた貴族たちは、春ごろに体調を崩したという一報が入り、日に日に悪くなっていた時の様子を思い出したのか沈痛な面持ちで席に座っていた。

「・・・明らかにおかしいとは思われませんか？」

フォンビレートは広間の中央、ジエームズの前あたりに進み出た。
「採決されたのは1-2月29日。・・・王国法は採決後半年経つてからの施行となることとなっています。となれば、書き加えられることができる日は最短で、翌年の6月28日ということになります。原本を書き換えるためには王の鍵も必要です」

広間を睥睨していた瞳をジエームズにひたと定めて続ける。

「お分かりですか？閣下。ヘンリル前陛下はその日より2月前もから『意思の疎通は困難』なほどに体調を崩しておられたのです。・・・どうやって、鍵をそろえることができたのですか？」

広間は驚愕で満たされた。

丁寧に時系列を追つて説明するフォンビレートの話に逃げ道はない。もし、これが本当ならばジョームズはひいては7大公侯爵は、筆頭書記官であったブルンジ伯にも罪があることになる。

「会議に出席しておられた方でもかまいません。・・・ブルンジ伯、閣下でもかまいません。どのようにして鍵を揃えることができたのか論理的に説明していただけますか？」

できますか？と問うフォンビレートの言葉に誰も応えることができ

なかつた。

「・・・陛下よりもしもの際は、といつゝとでお渡しいただいたのだ」

「そ、そうだ！！」

ジョームズが苦し紛れにポツリといほした言葉に便乗するよひに、
言い訳が始まる。

「われらは、陛下より厚い信任を受けておつた。・・・その陛下の期待に沿つただけだ」

「我らと陛下との縊に疑問を呈すなど言語道断だ！」

「言い訳は、後回しにしていただきよろしいですか？」

ルーン侯爵の言葉をさえぎつて、フォンビレートが囁く。

「あまりに醜く、聞くに堪えない。・・・皆さまの知らない事実を一つ申し上げましよう。・・・王家の鍵の保管者は、その時の第1位王位継承者にあるのです」

「・・・なに？」

フォンビレートの言葉にジョームズの顔色が変わる。

「疑問に思われませんでしたか？・・・あの時、いくら探しても分からなかつた鍵がシシリシア様の継承とともに出てきたことを

シシリシアから預かつた鍵をフォンビレートは掲げて見せる。

「7代国王陛下の治世の反省点を生かした処置として、王家は代々そのような処置をとつてゐるのです。・・・知らなくとも無理はありません。私もまた、シシリシア様にお聞きして初めて知りえた情報ですのです」

7代国王テリドアは、さまざま法律を制定したことで知られる。

その中にはあまりにも愚かしい法律が多数存在した。たとえば、『動物は一切傷つきてはならず、その罪は殺人よりも重い』などという法律はその代名詞といえる。その時の反省を生かし、『実際に施行されるのは原本改正後』であり『原本を保管するのは8本の鍵がそろわなければ開かない金庫』となつた。それに加えて王家では、

国王本人ではなく次期国王が鍵を所有することで、国政の混乱を防ごうとしたのである。

「昨年の冬も今年の春も、鍵の保管者はシリヤ陛下であり、陛下がこの鍵をヘンリル前陛下のもとに返されたことはただの一度あります」

「……では！私たちも手に入れられるはずがないではないか！！」「声をあげたベラキア公爵の方を見ながら、フォンビレートの声がこれ以上ないほどに強まる。

「お忘れですか？……前アルイケ侯爵であるケアリー様は第1位王位継承者であったことがあるのです」

ケアリーは鍵を保管する正当な権利を持つていた。だが、国王でなければそれを自由にする権利は当然有してはいない。つまり、その鍵を使用することもその鍵を複製することも、どちらも不正なのだ。「閣下は、ケアリー様が偶然に鍵を入れて、複製を行ったと思つておられたかもしませんが、そうではありません。ケアリー様が正當に保持する権利をお持ちの時に、職人の命じて作らせておいたものです。……最も、ケアリー様もすでにお忘れだつた御様子ですが。……その時の職人も連れてまいりましょうか？アルイケ侯爵」

フォンビレートの後ろには一目で職人と分かる者が待機しており、もし、ジェームズが否定すればすぐにでも証人喚問されるだろう。最後通牒であることは誰の目にも明らかにだつた。

「…………そつだ、複製を作つたのは父であり、それを使って不正に王国法原本を書き換えたことは認めよう」
ジェームズの言葉を待つていた人々は、それを聞いて深くため息をついた。

長い裁判の終わりが見えてきたように感じたからだ。

「……だが、それと今回の嫌疑は別物だ。私は暗殺を企んでなどいない。ただ、今この法案を可決させなければ国が混乱に陥ると思

い、強行しただけだ」

再びジェームズは否定して見せると、その頑迷な言葉に白々さを覚えながらも、これからどうやって本来の訴えを成立させるのかと意識を再びフォンビレートに集中させた。

視線を向けた先には、獰猛な笑みを浮かべたフォンビレートがあり、引き込まれる。

「閣下。閣下は執務室内で私に対しても罪をお認めになりました。それを否定されるのですか？」

「さて、何のことだ。・・・私は、私の言葉へ嫌疑がかかっていることを知り、身の潔白を知らせるためにここに来たのだ」

「私の仮の姿、ルシアに対して行われた言葉をも否定されたと考えてよろしいですか？」

「その件はすでに認めてある。自覚が足りなかつたことは認めるが、それだけだ。実行に移してなどいない」

黙り込んだフォンビレートに、ジェームズは我が意を得たとばかりに矢継ぎ早に話す。

「まさか、私室での話を罪に問つというのもあるまい？それは、すなわち我々への冒瀆だ。確かに・・・私は、私の気持ちを理解してくれると思つたルシアという男に話していた。だが、それは実行に移されるまで罪に問われないという前提のもとだ。・・・まさか、貴族は一言の愚痴を述べてはならないなどと言うのか？」

事實を言えば、愚痴を述べるような貴族は出世できないのだが、この場においてはジェームズの主張が正しい。貴族特権は建国以来認められた権利であり、明文化されていないとはいえ、それを無視することはできない。だが、フォンビレートは涼やかに笑つた。

「まさか、そのような愚かなことは主張いたしません。・・・ですが、閣下。閣下は10人以上の人々に対して御自分の罪を公に宣言しておられます」

「・・・!？」

「そうですね？ソーアイ团长？」

フォンビレーントが振りかえった先には、ソーアイが立っていた。言い訳を繰り返す父への動かしがたい感情を抑え込むように深呼吸をしつかりと前を見据える。

「アルイケ侯爵。……あなたが、罪を認められたことは公の宣言です。……我々、騎士団がその証人です！」

ソーアイの後ろに並んだ騎士団が、実は証言者であつたことに気付いたジェームズは天井を見上げ脱力した。

フォンビレーントは、ジェームズが法廷において否認する可能性を考え、逮捕の場に10人を超える騎士を連れていったのである。打ち合わせにおいて、そのことをフォンビレーントから聞かされたソーアイは驚きに、しばし思考が停止したほどである。

「閣下、これ以上はお止めください。罪が目の前にあるのに、盲目の振りをすることに貴族の精神などないではありますんか……！」震える声で訴えるソーアイの正視に耐えきれずジェームズは目をそらした。原告の、騎士団長としての言葉を取っているが、それは紛れもない息子からの懇願であった。

時を見計らつたように、法務大臣より声がかかる。

「ジェームズ＝ダイナン＝ダ・アルイケ侯爵。もう一度お聞きします。……国家反逆罪の罪を認めますか？」

「……認めます」

うつむいたまま返事をしたジェームズにソーアイは耐えきれないよう顔を背けた。

自分が信じてきた、信じたかつた者への複雑な思いが涙を次々にあふれさせる。

対照的に、傍に立っているフォンビレーントは無表情で一礼したのち、原告席に戻り裁定者の言葉を待つた。

「では、裁きを申し渡す」

一連の流れを微動だにせずに見つめていたシシリアの重苦しい一言に、場が一段と引き締まる。

「アルイケ。選択肢をやろ!」

シシリアの言葉に、ジョームズとソーヴは顔をあげた。

「本来なら、王国法にのつとり死罪を申し渡すところであるが・・・貴様の忠誠心に免じて、私は貴様に3つの選択肢をやる。どれでも好きなように選べ」

「・・・・」

「1つ、定めに従い死罪。2つ、ダ・ジョームズへの降格処分。3つ、幽閉処分。好きにしろ」

シシリアは死罪になるか、平民になるか、ただ生き続けるかのどちらかを選べと選択肢を提示した。

生きるという選択肢があること自体、國家反逆罪を犯した者への破格の処分である。

大抵の者は1を選ぶだろうと思つており、シシリアの選択肢は甘い餌をちらつかせるという残酷な処分であると考えていたが。

「・・・ダ・ジョームズとして生きていきます」

しばし悩んだのち、ジョームズが出した答えは周囲の予想を裏切つて平民として生きる道であった。

名譽を重んじる貴族としてはあり得ない選択肢である。当然、周囲は唚然とした。

だが、ジョームズの答えを聞いたシシリアはニンマリと笑う。

「ただ生きることも、死ぬこともしたくないと申すか?」

「可能であれば。私は、国を愛していますので」

ジョームズの間髪いれない答えに、さらりと笑みが深くなる。

「よし、その答えゆめゆめ忘れるな」

楽しげなその声に大広間は呆気にとられた。

「沙汰を申し渡す。ジョームズ＝ダイナン＝ダ・アルイケ。貴様からアルイケ侯爵位を剥奪する。同時にジョームズ＝ダイナン＝ダ・レライとして、生涯我が傍にあるよう申しつけん」

「……陛下……それは」

言葉の意味を理解したジョームズは座っていた椅子から転げ落ちるように跪いた。

つまり、それはシシリア自らが名を受けたということ、それを家名として用いることもできる（貴族の一員のままである）こと、そして「レライ（傍にあれ）」と命じられているということだ。

「何事が成したいのであれば、何事が成せる地位が必要であらう？」

「し、しかし」

温情をかけられているはずのジョームズの方が恐縮している。

「貴様の國を憂える気持ち、しかと理解したつもりである。それほどまでに強い愛国心を持つ貴様の忠誠を買えなかつたのはひとえに我の力不足である。……ゆえに、貴様は生涯我が傍にあって、私を見ていこう。必要なならば、今一度傷つけるがよい。その権利を貴様にやひうど言つていい。……不満か？」

この騒動の発端は、自分の力不足であり、『必要ならば』つまり、国の支配者としてふさわしくないと思うならば、殺すがよい。それを見極める機会をやひうどシシリアは言つているのだ。裏を返せば、必ず心酔させてみせると言つている。

それほどに力強い宣言を受けたジョームズはただ、言葉にならない嗚咽を漏らすのみである。

「いえ。……いえ。……仰せのままで」

それだけ言つと、跪いた姿勢のままうつむき肩を震わせた。

ジエームズが提案を受け入れたことを確認し、広間に視線を見やる。
「アルイケ侯爵位は今回の働きに報い、ソーア＝ラルフへ授ける。以後、ソーア＝ラルフ＝ダ・アルイケとして働く。今回の計画に加担したアルイケ侯爵家配下の者への処分も貴様に一任する。よきにはからえ」

「はっ」

「同時に、正規の手続きを踏んでいない王国法第1条細則4の無効を宣言し、ダン＝ウタヤ＝ダ・イジユールが王太子であることを確認する。・・・ダン、良いか？」

「はっ」

ジエームズへのあまりに寛大な処置に、シシリアのあまりに鷹揚な態度に、人々の注意が逸れている間に、シシリアは次々と処分を下した。

鮮やかな手並で、肯定しか許さずに進めていく。

「また、今回のことでの秘密主義による弊害も明らかになつた。よつて、御前会議の撤廃を行つ。緊急事態への対処など詰めるべき点は多いが、これまでよりも国民に近い王政には必要不可欠であると考える。・・・異論はあるまい？」

「はっ」

ベラキアを筆頭に御前会議のメンバーは全員頭を下げた。

「原本を保管する鍵は、1年毎の持ち回りとする。・・・リシュメ＝アイリス＝ダ・ブルンジ」

「は、はっ」

「今日より1年は貴様が保管しろ。・・・期待を裏切るな」

「はっ！」

「以上だ。その他、細かい処分についてはおつて沙汰を申し渡す。・

・大臣」

「はっ。・・・ジエームズ＝ダイナン＝ダ・アルイケ侯爵位の

裁判を閉廷する。異議ある者は申し出よー！」

広間はシンと静まり返り、一切の不平も不満も湧き出なかつた。

「沈黙多数により、この裁判の閉廷を宣言する！…」

法務大臣の言葉と同時に、シシリアは席を立つた。フォンビレートが素早く従い、共に出ていく。

扉が閉じられた後しばらく、皆放心状態で広間の空気が動く」とはなかつた。

「どうだ？」

フォンビレートから差しだされた紅茶を一口啜つたシシリアは、それをテーブルに置き、体操座りになつた。

「どうされたのですか？陛下？」

「だつて……フォンが怒つてゐるじゃない……」

「はつ？……なぜそのような結論に？…」

フォンビレートが首をかしげると、シシリアはガバッと顔をあげ

「……だつて！…紅茶の味が『よくもやつてくれましたね！…』の味なんだもん！…」

とだけ言うと、再び顔を伏せる。

『よくもやつてくれましたね！…』といつのは、シシリアが用いる独特的の表現で、他にも『怒つてますよ、とっても』の味やら『所詮、私の掌の上です』の味やらがある。

「……微妙にあたつているのが不満ですねえ……」

それが、また良く当たつているというのがフォンビレートにはむかつくるのだが。

子供っぽい言動とは裏腹に、紅茶一つでフォンビレートの心の機微を理解するシシリアはやはり優秀な主であつた。

「だつて、フォンの筋書きから離れてしまつたから怒つてるんでし

よう？」

「……否定はしませんが。面倒くさいからと言つて、アルイケ家の使用人の処断をソーアイに任せたことなどは良い例ですねえ……」

・

「うつ……だつて、労力と影響があつてないぢやない……」
アルイケ家のたかが一使用人を、どんなに良い判断を働かせて処断したところで、大したことではない。むしろ、処断をソーアイに任せてしまつことで、信頼していることを示し、使用人に対しても厳罰を科すこともなくなるという一石二鳥の良い判断ではあるのだ。

「それを見抜けなかつた自分の甘さに腹が立つといいますか……」
シシリアの第1の家臣を自認するフォンビレーントとしてはそれを読み切れなかつたことが悔やまれるのだ。結果、紅茶の味に乱れが生じ、それを見抜かれた。

「でも、フォンのおかげで助かつたよ？ ありがとう」

主に満面の笑みでお礼を言われば吹つ飛ぶような些細な後悔ではあるが。

「何はともあれ、見事な判断でございました」

気持ちを切り替え、姿勢を正して頭を下げる。

「あなたもね。……騎士たちの説得が間に合わなかつたならどうしていたのか知りたいところだけぞ」

騎士というものは、爵位を継いでいない貴族がなるものと相場が決まつてゐる。つまり、あの場に出席していた貴族達の子供たちが大半を占めるのだ。その者たちに對して、もしかしたら自分の父親が不利になるかもしない証言を行つてくれるかどうかは、半々の可能性でしかなかつた。計算できない以上手札とすることはできなかつたのである。ジェームズが鍵の件だけで認めたなら使うつもりはなかつた。だが、ジェームズが最後まで否認しようとしたこと、説得が間に合つたことをソーアイが耳打ちしたことにより、そのカードを切ることができたのだ。

「ソーアイが説得にあたつてくれましたので。……騎士たちの説得

が間に合わなかつた場合を聽くのは御勘弁いただければと思います「超法規的措置も辞さなかつたあることは明白で、それにシシリ亞はうすら寒いものを見えた。

そんなことを気にせずに、フォンビレートは話をもとに戻す。

「ですが、シシリ亞様もこれ以上ない戦略的な処断だつたと愚考いたします。どさくさにまぎれて御前会議を廃止したことも、それにヨツて公侯爵たちに釘を刺したこと、ブルンジ伯に罪を灌ぐ機会を与えたことも、あのタイミングの他は行えなかつたでしよう。それに、優秀な行政官を手に入れました」

実際、公侯爵はあれ以上の处罚があつても良いのだ。ただ、彼らの罪は「王家の鍵を不正に使用していることを知つていたものの見逃していた」というものであり、直接的に手を下してはいない。ジェームズが複製と使用的罪は被つたので「私は知らなかつた」とでも言えば、どうにもならない。ジェームズとは違い、行動を起こしてはいなかつた。また、王政を始めたばかりのシシリ亞が貴族の歓心を買い、なおかつ、優秀な手駒を手に入れた裁きは、歴史に残る名裁となるだろう。

そんな、深い裁きに、フォンビレートは最大限の敬意を払つて言つが、シシリ亞はあまり乗らない。

「ん・・・・・まあ、フォンがそんな顔をしてたからねえ・・・・紅茶を飲みながら、自分の成果に対しては生返事よろしく返すシリアに、フォンビレートは顔を盛大にひきつらせる。

「・・・差し支えなければ、どんな顔か教えていただいてもよろしいでしようか?」

「んー、『いまだ!-やれ!-』顔?」

遠慮会釈ない言葉に、フォンビレートは再び脱力した。

「ところで、陛下」

他愛のない話をある程度したところで、フォンビレートは案件を切り出した。

「例の件については、私へ一任してくだされどこいつとでもなにでしょ
うか？」

「ん、それこそ、よきにはからえ、よ」

「ありがとうござります」

「まあ・・・あなた達にしか分からぬこともあるでしょ。つい。好き
きにするといいわ」

シシリーアに深々と頭を下げ、部屋を出るため踵を返す。

その背に、シシリーアの声がかかった。

「ねえ、フォン？・・・私、あなたを私の執事にしたことを、今ま
で一度も後悔したことはない。これからもきっとそう。たとえ、
周りの評価がどうであろうと、あなたの全てに關して、私は恥じて
いないの。・・・それだけは、覚えておきなさい」

その言葉に返事はせずに、胸に刻んで、フォンビレートは敵と相対
するために出て行つた。

向かうはメリバ宮殿である。

「お久しぶりです」
メリバ宮殿の外に2つの人影を認めて、フォンビレートは声をかけ
た。

「任命式の時以来か」

「ええ、そうなります」

「我々を逮捕しに來たのか？」

「ええ、そうなります」

機械的に応えるフォンビレートに、片方が盛大に舌打ちした。

「そういうところが、俺は嫌いだ！」

言葉づかいをかなぐり捨て、激昂のままに話す。

「ええ、存じております。・・・これほどまでとは思いませんでしたが」

対して、フォンビレートは常日頃のトーンとほとんど変わりない。「それほどまでに、孤児である私が憎かつたのですか？ダニタ様、パメラ様」

人影は前イジュール家筆頭執事ダニタとカイル付きの執事の任についていたパメラだつた。

「お前が！！お前ごときが筆頭だと！？」

「お前を第3執事として認めたことを私は今でも後悔している」特にパメラは、孤児であるフォンビレートのことをことのほか嫌つており、イジュール家においてすさまじいじめを加えた。それを耐えきつたフォンビレートはイジュール家では伝説と化している。そのパメラをかわいがつていたのが、ダニタだつた。だから、ダニタもフォンビレートを嫌つてはいた。

また、パメラはカイル付きであつたこともあり、順調にいけば筆頭執事に就任してはいたはずだ。目の前で逃したものの大さが、そのままフォンビレートへの憎しみを増長させた。

「お前のような下賤な者が、王家を我が物顔で歩き回つている。・・・許せるものか！！虫唾が走る」

呪詛のようにして、聞くに堪えない罵詈雑言を並べ立てるパメラとは対照的に、フォンビレートは無表情を崩さなかつた。

「だから、シシリア様を狙つたのですか？」

「そうだ！！貴様の無能さをシシリア様に分かつていただこうとしたのだ」

この一人は、シシリアのメリバからの引っ越しの責任者であつた。その引っ越しをわざと遅らせることにより、意図的にジェームズの計画が明るみに出るのを遅らせたのである。

「そんな、くだらないことで、シシリア様を危険にさらしたのですか？」

フォンビレートの氣迫のこもつた問いかけに、僅かに怯んだが、咄

みついてくる。

「お前が、お前が悪いのだ……お前のような無能な男がシシリア様の傍にいるのが悪いのだ……」

あまりにも理不尽で、あまりに屁理屈な返答を並べ立てる一人から目をそらすと、フォンビレートは背後に控えていた騎士たちに命令を出して、一人を捕らえさせた。

「ダニータ＝イエール＝ダ・クレマ。およびパメラ＝オージ＝ダ・スワル。国家反逆帮助の罪で逮捕する。……言い訳は法廷にて行うがいいでしょう。……連れて行け……」

騎士に引きずられるようにして連行されながらも、一人は口を止めない。

「みんな言つているぞ……あの、孤児がいるからシシリア様が嫌いだつてな……」

「お前のせいだぞ……ヘンリル陛下だつてお前を嫌っていたのだから……」

遠ざかる声をその場で受け止めながら、フォンビレートは掌を握りしめた。

下唇をぐつと噛んで耐える。

出発前に聞いたシシリア言葉を思い出して、感情をやり過ごすと、確かな意思を持つて闇に歩を進めた

後の歴史家によつて、シシリアの治世中における10大事件に数えられることになつた「アルイケ茶葉事件」はこうして誰の目にもつかないとこひで、ひとつそりと幕を閉じたのであつた。

処断と終結（後書き）

これにて、第1部終了です。

2部からは別の事件が始まる・・・予定です。
その前に、小話とかそんなやつを入れようと思つていますが、お付
き合いいただければ幸いです。

薄汚れて美しい 前篇（前書き）

小話・・・のはずが・・・
すみません。

シシリアとフォンビレートの出会い編です。
よろしくお願ひします。

追記：友人より「ジャンルおかしくね？」という指摘があったので
その他からファンタジーにカテゴリー替えしてます。（それでも、あ
つてるか良く分からない・・・）こっちの方が！みたいなのがあつ
たら教えてください。

薄汚れて美しい 前篇

「今年の冬も寒いわね」

執務室、暖炉の前にわざわざ移動された机に向かいながら、シシリアは零した。

窓は全面が雲つていて、憂鬱な気分をさらにあおりたてている。横を見れば、夏と一切変わらない恰好でフォンビレートが書類整理に勤しんでいて、見ているだけで寒気が起きた。

「あなたって、寒くないの？」

「いえ・・・・割と好きなので」

素知らぬ顔で返すフォンビレートにシシリアは思いつきり顔をしかめた。

カルデア王国に『冬が好き』などとのたまるバカがどれほどいるかわからないが、これほど涼しげに言う奴は絶対にいないと思つ。本当に、

「・・・・なんて変わつているのかしら・・・」

偏屈だとは知つていたが、ここまでとは知らなかつた。と言ひと、フォンビレートは作業を止めて、じあらを向く。

「あなたに、拾われた季節ですか？」

言つだけ言つて、再び作業に戻るフォンビレートにしばし呆気にとられたが、数秒後に言葉を理解して、納得した。

そうだった、今日は、フォンビレートと出合つた日だった。

唐突に思い出されたそれに、シシリアの頭は”あの日”に飛んで行つた。

「コルベール暦1531年の冬のある日、シシリアは窓の外を退屈気に眺めていた。

カルデアの冬は厳しい。外に出ようと元気な者はほとんどおらず、眼下に広がる町並みはもれなく、暖炉の使用による煙突から煙で覆われている。

それはここアーテルでも王宮殿・フィラテルでも同じことで、「出勤すれど仕事せず」が冬の間の暗黙の了解だ。最低限しか仕事を行わず、部屋に閉じこもり暖炉の前から一步も動かすとも咎める者はいない。

シシリアもまた、御多分にもれず暖炉の前で無意味に時間を潰していた。

といつても、春夏秋冬、彼女の働きを求める部署などなく、時間を無意味に過ごすことにはあまり冬は関係ない。せいぜい、暖炉の前で過ごすか、木陰で過ごすかの違いに影響するくらいのものだ。

「ねえ、メアリー？ 退屈つてどうしたら潰せるのかしり」「窓の外を見つめたまま、どうにかして退屈を紛らわそうと、自分についている侍女に無理難題を言つ。

その質問に、メアリーもまた退屈そうに

「そうですねえ……」

と氣のない返事を返す。一応、どうしようかと考え込んでいる振りはしているが、名案が出てくる気配はない。

貴族たちの冬の間の暇つぶしは、カードをしたり盤をしたりと室内で遊ぶことなのだが、いかんせんシシリアはそれらが得意すぎて退屈、というタイプの人間であった。なにしろ、1年中それらをしているのだから、そこらの貴族とは実戦経験が比べ物にならない。夏であれば、飽きた時点で外に出る選択肢ができるわけだが、今は冬である。

カードと盤以外の、となるとなかなか難しい。

それゆえ、シシリアにとつて冬とは他より一段と退屈な季節である。

沈黙のまま、数十分が過ぎたがなにも案は出ず、昼の鐘が鳴つたことで思考はいつたん中断となつた。

昼も滞りなく終わり、シシリアは再び暖炉の前に舞い戻つていた。
ご飯を食べつつ考えてみたが、何も思い浮かばず、眠くもなつてしまたためである。

そのまま1時間か2時間が経過した頃、眼下に動くものを発見してシシリアは目を凝らした。

子供たちが元気に遊んでいる姿が目に入る。

「子供達は元気ですねえ」

とメアリーも声をかけた。この厳しい寒さの中、幾人かは半袖で外に出ているようだつた。

煙の合間合間の姿から察するに、鬼ごっこをしているようである。

それを観察していたシシリアは何となく元気になつて来る気がした。そうだ、自分だつてまだ20代（正確には先月30の大台に突入したのだが、彼女は20代と自称している）なのだから、遊ぶのは無理にしても散歩ぐらいは大丈夫なはずだ。

コートを着て、防寒対策をすればなにも問題はない。

「そうだ！外に出ましょー！」

喜び勇んで侍女を振り返つたシシリアにメアリーは盛大にひきつた笑顔を返した。

シシリアが外に出るということはすなわち、メアリーも付いていか

なくてはならないということであり、そして彼女はそんなことはしたくはなかつたから当然である。

何度も言つがカルデア王国の冬は厳しい。今の気温は 2 度である。防寒対策をしても問題が大有りの気温であった。

それでも、キラキラした瞳に「名案じやない?」という言葉が浮かんでいる主人に反対するわけにもいかず、メアリーは急いで最高級の毛皮を準備しに走つた。

メアリーと御者と馬とそれから親衛隊を巻き込んだシシリアの外出は、今のところ順調に進んでいた。

もちろん、御者は猫背での運転を余儀なくされていたし、親衛隊は冷たい鎧の感触にあののいていたし

メアリーはおもしろくもない白い景色に意識を集中しなければならないほど凍えていたが、それでもシシリアにとつてそれは順調な道のりだった。

あたりは静まり返つていたが、時折聞こえる笑い声や道急ぐ馬車の轍の音が人々の存在を教えてくれてる。

「シシリア様。どちらに進みましょうか?」

飽きることなく馬車の窓に顔をくつづけていたシシリアに御者から声がかかつた。

「右に進めば、大街道を進むことができますし、左に進めばアーデルに戻る道となりますが」

ふむ、と御者に言葉に考え込むシシリア。

その他の者は、なんとかシシリアが左の道に進んではくれないだろうかと祈るような想いで言葉を待っていた。

だが、シシリアが示したのは第3の道。

「うん、まっすぐ進むのがいいわ

正面に伸びる細い道を選んだのだ。

「シシリア様！？」

あわてた様子で、親衛隊長のバルクが声をかけた。

「このまま進まれますと貧民街に出てしましますし、道が細すぎて馬車も入りません」

バルクの言葉通り、正面の道には薄汚いバラックが並んでいて、空気が淀んで異様な雰囲気が醸し出されていた。
もちろん、治安も悪く道も汚いため、貴婦人たるシシリアが歩いて散歩することも不適当である。

だが、そんな制止の言葉をシシリアは笑み一つではねのけた。

「いやよ

「…………」

目を丸くする周囲にシシリアは高らかに言い放つ。

「貧民街、などと表現する人間の忠告など聞きたくもないわ」

混じりけなしの純粹な怒りを含む彼女の言葉に、誰も口をはさむことができなかつた。

「貧民街、ですって？だが、そんな名前を決めたのかしら？まさか、私の知らない間に改名されたのかしら？」

置みかけられるそれに答えをもつ者など誰もいない。

「言い直しなさい。バルク。

」とシシリアは親衛隊長に命じた。

「正面の道はどこに続いているの？」

「はっ！・・・ピヨードルフ地区に続いております」

間髪言えずに返された言葉に満足げにうなずいて、シシリアは再び宣言する。

「正面の道に行くわ。馬車や馬は入れないから、皆歩いて付いてき

なさい』

「「「はつーー。」」」

返事に満足したシシリアは、一切の躊躇なく馬車を降りて歩きだした。

数人の番を残し足を踏み入れたピヨーデルフ地区は、やはりと云つべきか、薄汚れている。

道端にネズミの死骸が転がり、時々、人間の一部であつたであろうものも散見された。

何か声が聞こえたような気がしてそちらを見れば、それは浮浪者であつて、

「・・・お恵みを下せえ・・・お恵みを下せえ・・・
と、ただただ虚ろに呟くだけの存在であつたりする。

その惨状に何も手出しできない現状に、シシリアは唇を噛み締めた。カルデア王国はピレネー大陸第2の大國であり、豊かな国であると言われている。「草原の国」と名付けられるほどに緑が豊かで、産物もあふれんばかりだ。

それでも一歩裏路地を行けば、行き場のない濁みが渦巻く場所が存在する。

それを目の当たりにしたといひで、王位継承者でもないシシリアに出来ることはほとんどない。

例え、ここにいる1人か2人に憐れみを示すことが出来たとて、それが何になるだろう。

『責任のない施しは、行わなかつた者よりも悪い』

幼少の頃に習つた教師の言葉を思い出す。

最後まで支援しないならば、それはただの自己満足であり、性質の

悪い気まぐれに過ぎないのだ。

本当の意味で解決したいならば、恒久的に救わなければならず、現在のところその手立ては誰も用意できていない。真剣に解決したいと思つてこる者がいるかどうか自体が疑問ではあるが。

「うう・・・・」

不意に、物思いに沈んでいたシシリアの耳がうめき声をとらえた。どうにもならない現実を見るだけにしかならないと分かつていても、それから目を反らしてはならないという気持ちがシシリアの目を勝手にそちらに向ける。

音の聞こえた細い路地を見れば、その一番奥に人影が見えた。目を凝らしてみれば、一方的に馬乗りになつて小さな子供を殴つているのが分かる。

それを確認した途端、シシリアの体が反射的に動き出した。後ろで、バルクが「殿下！？」と叫んでいるのも耳には入らない。

「やめなさい！？！」

躊躇なく二人の間に突つ込み、殴られていた方を庇つよう立ちはだかる。

殴つていた方は、急に突き飛ばされたので意味が分からないと、顔で周りを見渡していたが、シシリアの姿と恰好に目を止めると、いやらしい笑いをした。

「これはこれは、御貴族の御令嬢がこんな薄汚い路地に何の用で？」シシリアの全身を舐めまわすように見て、どつしてやうつか、と考えている顔つきだ。

そんな視線を浴びたことのないシシリアは答え方が分からず、じつと黙つていた。

「・・・・これだから、高貴な方は困る。・・・我々、下賤な民のことなぞいつもは氣にもかけない癖に、正義を振り回すんだから・・・

「

男の怨嗟のこもった視線に、シシリリアはたじろがされた。
放たれた言葉が深く心をえぐる。自分のしたちつぽけな行動が、どう
れほど滑稽か思い知らされたからだ。

『いつもは気にもかけない癖に』。その言葉に反論する術をシシリ
アは持たなかつた。

「シシリリア様！！」

立ち尽くすシシリリアに、駆け足で親衛隊とメイドが声をかける。
追いついてきたバルクを見た男は、小さく舌打ちすると、壁をよじ
登つて逃げ出した。

「御無事ですか！！」

追いついてきた親衛隊に指示を出して、男を捕らえようとするが、
シシリシアはそれを制した。

子供の周りに散らばつた果物を見れば、泥棒によつて殴られていた
ことは明白であるし、なにより男の言葉が耳にじびりついて離れな
いからだ。

「戻るわよ」

静かな命令に反論することもなく、撤収の指示が出される。

「バルク。・・・その子を連れてきて」

シシリシアがその子を連れていいくと、周囲はざわめ
いた。

助けることがどれほどのことにもならない事を自覚している。そ
れも、盗みを働いた子供を連れ帰ることは何にもならない。

「いいのよ、とにかく連れてきて」

諫めようとした周囲を遮つて、シシリシアが歩きだすと渋々歩きだし
た。

「・・・本当に連れて帰られるのですか?」

おずおずといった感じで質問するメアリーに、シシリアは頷く。意識を失ったままの子供は、シシリアの命令により、アーデルに戻る馬車に運び込まれていた。

彼女の膝には、子供の頭が置かれていて、コートやドレスは汚れてしまっている。

「私が助けたから。最後まで責任を持たなくてはいけないから」メアリーをまっすぐに見返しながら、シシリアはしつかりと表明する。

だが、メアリーは困ったような顔を崩さない。

「しかし・・・連れて帰ったところで何もできないかと・・・」シシリアは独身であり、養子にすることはできず、せいぜい最下級使用者として雇うことぐらいだ。

それでも、問題はある。

「ペリーードルフ地区の者を雇つた前例はないので、難しいですし・・・」

王家の使用者となるのは、男爵や子爵といった下級貴族の一男や二男が多い。まがりなりにも貴族しか雇わないのは、王家として当然のことと言えよう。一部の使用者、例えば料理人などは平民から徴用されることもあるが、それは貴族の食事を作れるほどに裕福な食事をしたことがある者たちだ。

もしも、この子供を雇つたとしても受け入れられる可能性はあまりない。

人間はプライドが高いと相場が決まっている。平民の、それも最貧民の人間とともに働くことを承知するとは思えない。

「・・・それは、後々考えればいいわ・・・とりあえず、連れて帰る」とよ

それこそ、天国と地獄を味あわせるようなものではないか、とメアリーは思つたが、懸命にも声には出さなかつた。シシリアの方も特に会話は求めていなかつたため、そのまま馬車の中は、静寂が満ちる。

シンシンと振り続ける雪の中、馬車は宮殿を目指して静かに進んでいた

薄汚れて美しい 後篇（前書き）

小話・・・のつもつの後篇です。

お気に入り登録があるのに気付いて、テンションのままに突っ走りました。

多々、おかしいことあるかもせんが、御容赦ください（汗）

感想等あつましたら、よろしくお願ひいたします。

薄汚れて美しい 後篇

「お帰りなさいませ、シシリ亞様……」

シシリ亞の帰りを待ち構えていた執事は、挨拶の途中で彼女が抱えているものが人間であることに気付き、言葉を途切れさせた。

「……どこの御子様ですか？」

とてもそうは見えないが、もしかしたら『怪我をした貴族の子供』とか、そういう存在であることを願って、聞く。

「ピューローデルフ地区の子供よ。ひどく殴られていたから連れてきたの」

早口で言つシシリ亞に、やはりそつか、と小さくため息をつく。この主人は、昔から拾い癖があるので、そのせいで、屋敷内は清潔さをダメにしてしまつほどの犬猫があふれてしまつてゐる。

「今度は、子供ですか？」

小さいころから見ているため、やや咎める口調で話す執事に、シシリ亞はうつと怯んだ。

「……私が助けた。・・か、ら、私がこれからも助けるの」

「そんな不毛なことをずっと行えるとでも？」

「……今回だけよ」

シシリ亞に責任とは何かを教えたのは、この執事とその父親だった。教えを守れない子ですねえ・・・とばかりに言われる正論にうつむいて、なんとか言い訳を返す。

その様子を見た執事は、口頃はきちんとしているシシリ亞がこれほどまでに執着しているのに驚いた。

たとえ連れ帰ったとしても、使用人に預ければいいものを、自分の手でどうにかするのだと駄々をこねてゐる。

シシリ亞といふ子供は、良くも悪くも諦めを知つていた。

やれることとやりたいことの違いを知つていて、王家の力の正しさを使い道もわきまえていた。

道端にいた子供を1人だけ助ける、という行為があまりにも馬鹿げていることも分かっているに違いない。だが、それでも。といつのだから、それはそれでいいではないか。

そう結論付けた執事は、背後に控えていた者たちに指示を出した。「医者を呼ぶように。それから、数人でこの子を洗つてあげなさい。・・・シシリア様の寝室に寝かせる、とこいつことじょうじですか？」

振り返つて確認すると、シシリアはなんだか泣きそうになつていて、とても30になつた女性には見えない。その表情が幼き日々を思い出させて、執事は頬が緩みそうになつた。

何とか抑えて「よろしいですか?」と再度確認を取ると、シシリアの頭がこくんと振られた。では、そのように。と優雅な礼をすると、執事は急いで食事の用意をしに厨房に向かった。

「体中に傷がありますが、命にかかるものはありません。・・・少し熱を持っていますから、今夜は日を覚まさないでしょ」が、元気になると思いますよ」「

そつ診断を下した医師に、思わず「ありがとうございます」といふと、驚いたよつて日を見張られた。

王家の者は軽々しく礼を言つべきではなく、この場合の正しい答え

方は「大儀であった」である。

それほどまでに子供を心配していたことをくみ取つた老医師は、小さい時から変わらないのだなあと、古い者にしか分からない感慨を抱いて「いいえ」と返事をし、部屋から出していく。

それを確認すると、シシリアはすぐに子供の方に向き直つた。

泥を落として現れたのは、美しい金髪であった。眼は閉じられていて、色は分からないが、この国の大半分は蒼色の瞳をもつてゐる。もし、それと合わされば、たゞかし美しいだろうと想像できるような顔であった。

だが、その体は傷だらけで、これ以上どこに傷をつければいいのか分からぬほどだったらしい。

なにが彼に起こつて、どこがどうなつてあの状況になつたのか正確には判らないが、それでも、例え彼が間違ひを犯した側であつたとしても守りたい。

それが、現在のシシリアの嘘偽りない心であった。

穏やかな心情と、子供の穏やかな寝顔にシシリアはゆっくりと眼をつぶる。

起きたりいろいろ聞けばいい。

- それまで、眠りつ。

「・・・・・い・・・・・お・・・・・・つて・・・・・

ゆさゆさと揺ゆかれる感覚に、シシリアの意識が急速に浮上していぐ。

「おこつてばー！」

耳元で叫はれたことで、完全の覚醒した。

「 」

大絶叫したとしても悪くない。

「…………お願いしますから、主として、レディとして、今後のよ

ねちねちと繰り返される執事の説教に、シリアはそっぽを向いた。叫んでしまったことで、宮殿中の使用人が集まり、拳銃の果てには親衛隊も参上したのである。

駆けつけて、「シリリア様！！」と飛び込んでみれば、明らかに人畜無害な美少年と、絶対に襲われていなきそな主がいたのだから、皆ばつが悪い。

「俺は、何にもしてねえからな！！」

言ふた少年に返す言葉もなく、執事を残して引き揚けた。騒動の原因を作つたシリヤ本人は余程気まずかつたに違ひない。顔を赤くして、少年とも執事とも違う明後日の方向に顔を向けたまま、微動だにしなかつた。

「では、私は失礼しますが、このような事の無きよつに・・」

美少拜の「面倒くさいが、うれしい顔」

美少年の「面倒くさいな」という顔が効いた事もあつたが。

執事が出て行くのを確認して、しばらくじいっと待つて、シシリアル

「少益の刀に目を向け」

言い訳を口にしようと思ったのだが、美しさに負けて、何も言えない。何より、紺碧と緋色にわかれたオッドアイがその迫力を2割増しにさせていた。

「…………」めんなさい

結局、シシリアはとりあえず謝罪する羽目になつたのである。

「……俺は冷たい奴だから生き残れたんだよ」

食事を与えたことにより、いくらかシシリアを信頼してくれたらしい彼は、割かし素直にしゃべってくれた。だが、その少年の名前や生き立ちを聴いたシシリアは想像を絶する衝撃に襲われた。

「親？ んなもん、知らねえよ。気づいたら、『ミニ漁つてたからな。なんか、後から聞いたら俺、ボロボロで捨てられてたんだと……その後？ … ゆーかい？ ってヤツなんかされた。俺、金髪だろ？ だから、良く似てる貴族様の身代わりとかにされたんだってさ。良くわかんねけど。 …まあ、飯にありつけたから別にいいよ。で、売つぱらわれてえー・・・んでき、人殺せるようになつたんだよなあー。これがなかなか使えるんだよ。で、俺買った奴殺したんだけどさ、追われちゃつてさ。まあ、全滅させたんだけどね。 … ああ、昨日？ 昨日はむ、腹減っちゃつて。んで、あのくそじじいが持つてた果物がさ、うそなもんで取つたらすっげえー勢いで追いかけてくんの。 … 足には自信があつたんだけど、腹減つて力でなくつて。んで、殴られて、死ぬかなーって思つたら飯食わしてくれる綺麗な家に居たつてわけ」

親がない。字面にすれば、僅かな文字数しかないそれが、どれほど重いことか知らされる。

彼が軽い調子で話すそれに、もつ何と言つていのかわからなかつた。そんな状態で良く生き残つたものだと心中で考えていたら、フォンビレートは「冷たい奴だからな」と飄々と言い放つた。それこそ、大人のようだ。

『「あそこで生きている奴はみんなそうさ。・・・そりゃ、中にはいろいろ小難しいことを考えている奴もいるけどね。・・・でも、大抵の奴はこう思つてる。「生きたい」ってね』

「でも、あそこは『みんな』は生き残れないんだよ。だれかを踏み台にしなきや死んじまつ。・・・踏み台に進んでなりたいんて誰が思つて話だよな」

「皆死なないよう、俺が生き残つてやることの何が悪い、ってね」「だから、あんたにやあ納得いかないかもしないけどさ、あいつのこと悪者にするのはどうかと思うね。・・・俺にとっちゃ悪者で、俺は憎んでもいいけど、あんたが『悪い』っていう権利はないと思うよ?俺もさ、飯にありつけて嬉しいわけだし?・・・もしも、あんたが先に自分の財産から少しでも分けていれば、あいつはそうしなかつたんだからね」

「自分を正義つて思つてるやつが一番たちが悪い。・・・悪いつてわかつてもそういう奴は2番目に悪い。・・・だから、あんただつて、悪い奴だよな』』

無邪気さなど微塵も見当たらぬ普通のトーンで紡がれるその理知的な言葉は、シシリリアをその場面に立ち返らせた。

『普段は、見向きもしな癖に』

あの男とは違い、フォンビレートはシシリリアを特段に責めているわけではない。

ただ、シシリアが「大変だね」と言つたことに對して、答えただけである。

だが、それはシシリ亞に深く深く刻み込まれた。

「あんたも結局、何もしない奴になるんだろう？」

あんたも結局、何もしない奴になるんだろう？

あの日のフォンビレートの問いを、シシリ亞は今でも覚えている。それが、王座に就くことに同意した理由だからだ。

シシリ亞はあの日まで国政になど何も興味はなかつた。もちろん、期待されてもいなかつた。適当に貴族と結婚し、火種にならない程度の優秀な子孫を残す。それが、シシリ亞のあるべき姿だつた。けれどあの日、フォンビレートに出会つて、その成長を見て、考えるようになった。

結局、何もしない奴は。
結局、悪い奴だ。

その単純な真理を、僅か5才の子に知らしめるような現実などぶち壊してしまえばいい。

そう思つて、王座に就いた。

決意を思い出しつつ、シシリ亞は横にちらりと目をやる。そこにはいつもと変わらぬ表情で、書類を分類しているフォンビレ

ートがいた。

自分よりはるかに優秀な、それでいて盲目的なまでに愛情を注いでくれる執事に、くすぐったいものを覚えてクスリと笑つた。

「何か、顔についていますか？」

シシリアにしかわからない「困った」顔をした執事に、もう一度、今度はいたずらっぽく笑いかけると、手元の書類に目を落とす。

窓ガラスは変わらずに曇っているが、シシリアの憂鬱な気分は、もう吹き飛んでいた。

薄汚れて美しい 後篇（後書き）

次話からは、大陸の様子も入れていこうと思います。
事件の概要はもうできているのですが・・・大体の筋ができたら投
稿しようと思います。しばらく時間がかかるかもしれません、待
っている人がいるかもわかりませんが、気長にお待ちいただければ
幸いです。

狂い病 前篇（前書き）

第2章スタートです。

今回も、少しずつ伏線を張つていけたらと思つています。（思つて
るだけです・・・頑張ります）

あつ、それから今回の話は少しだけR - 15ではないんですけど、1
5歳未満が知つて欲しくないような・・・言葉が出てきます。直接
的表現とかはありません。それでの判断をお願いいたします。

狂い病 前篇

比較的穏やかに営まれているカルデア王国民の生活だが、一部刺激を求める者がいるではない。

彼らは「冒険者」あるいは「開拓者」と呼ばれ、未開の地を探索することを生業とし、新しい発見をもちかえることを至上の喜びとする。

もちろん、冒険にはつきもの危険は当然のように存在するので、毎年死者も出る。

『生死不確定者』というのがその正式名称で、1月の間連絡が取れない者はそのように呼ばれ、家族にも通達される。時たま、その後に戻つてくるような猛者や幸運の持ち主がいるが、そういうした者からは冒険者資格が剥奪され、冒険者ギルドの提示する仕事を行つことが定められていた。

むやみに悲しみを増やすのは、政府の是とするところではないからだ。

ただ、彼らが持ち帰るモノには、有用な薬草や希少な生物がいるので禁止はできない。

『冒険は手の届く範囲で楽しみましょう』といつのが、ギルドのひいては政府の本音であつたりする。

だからこそ、

「どうしようか・・・」

「どうこう案件は非常に困るのだ。

「しかし、困ったものだな」

「ええ、狂い病は原因がわかりませんからね。・・・未開拓地に踏

み込んだ者であること以外に共通点が見当たりません」

シリシアは手元に舞い込んできた書類を見ながら、ため息をついた。秋を感じつづまつたりとくつろいでいた彼女のもとに、王国南の未開拓地・ワルメール側のギルドから報告書が届いたのは今朝のことである。

『狂い病の者が帰ってきたが、昨日の朝に息を引き取った』という内容だった。

『狂い病』といつのは、未開拓地に踏み込んだ者が、狂ったような状態で帰ってくることを指す。

帰ってきた者がそつだと判定されれば、すぐに隔離施設に入れられ、家族でさえも会うことはできない。

そうして施設に入れられた者たちは、見えもしないものを田で追い、聞こえもしないものに耳を澄ませ、ありもしない恐怖に身を竦ませる。最後には、100%死に至る恐ろしい病だ。

治療どころか意思の疎通も測れないため、何もできないというのが現状だ。

未開拓地には想像を絶する「何か」があつて、病にかかるのだろうというのが、ギルドと政府の共通の見解であった。過去何度か、騎士団により構成された調査隊が赴いたが、「何か」に出会うことも、狂うこともなかつたため、失敗に終わっている。

「やはり、もう一度、調査することが必要でしょうか?」

「そうだな、ひとまずは南のワルメールも、北のアーデルハイトも、立ち入り禁止にするべきだろ? か? ・・・貴様はどう思ひ、レライ

イ

約1年の謹慎処分を経て、今年の夏から王位補佐に就任したレライに声をかける。

女王の机と向かい合うようにして、仕事をこなしていたレライはメガネをはずしながら考へ込むよくな仕草を見せた。

「……そもそも、病の原因が解明されないことが問題でしょう。それなくしては、”いつ”解除になるかも分からぬ、ということになり、そのうちに、『あつて無きが如し』の通達になるでしょうね」

現実的な指摘に、シシリヤもまた、そうか、と深々とため息をつく。未開拓地に行くような物好きは、自分の命を使って楽しんでいる。「死」を覚悟して入っているのだから、とやかく言つた、というのが彼らの主張だ。ただ政府としても、「絶対に」死ぬような状況を放置することもできないのだ。

「やはり、原因の解明が急務か……」

原因さえ分かれば、例えば『春の月は流行る』とか『この薬を飲めば』等が分かるのだが、いかんせん、帰ってきてから1月保ったものはいままでにいない。短い期間では解明できるはずもなく、ただ臨床例が山のように増えていくだけだ。

「どうにか、原因が見つかればなあ」

「そうですね……」

フォンビレートも同意する。

未開拓地の中は、全くの未知数だ。

冒険者というのはカルデア王国建国時から居たと言われる。つまり、1500年もの間、冒険者はそこに挑み続けてきたのだ。それにも関らず、これまでに解説された地図を作られた範囲は10分の1程度だろうと言われている。ワルメールはその開拓地の向こう側がロンドー大統一帝国につながっていることがほぼ確実だが、アーデルハイトに至つては、海であるうと推察されるにとどまっている。方位磁石が効かなくなる場所があり、思つようといかないという現実もある。

「これまでに、狂い病が治つた者はいないのでですか？」

「…………難しいだらうなあ……」

レライの質問に、シシリ亞は難しい顔をした。

『狂い病』と名付けられたのだって、ここ4、50年のことだ。

その頃はまだ、冒険者ギルドが設立されていなかつたので、民の間で風聞としてささやかれていただけであり、『病』ではなく、『呪い』と捉えられていた。

曰く、神物に触つて罰が当たつた。曰く、天女に手を出した。未開拓地を舞台に書かれた御伽噺も手伝つて、それを面白おかしく話すだけだったのだ。

ギルド設立後、同じような症例だということで、解明が行われるようになつたのであり、現在に至るまで回復に至つた者は報告されていない。

手詰まり感が漂い始めた執務室で、不意に、フォンビレートが声をあげた。

「・・・・・1人だけ、それらしき人物を知つております」

「えつ？」

「確証はありません。もしかしたら、という程度のものです。そもそも、その話は昔話にも相当するような話です」

フォンビレートのモットーは『不確定な話は主人にしない』というもので、彼にすれば相当不本意なことなのだろう。他に、もつと有用な情報があればそれだけ告げたに違いない。だが、あまりにも手持ちの情報が少ない中では、背に腹は代えられぬ、というか、息詰まるよりはましだということで話すことにしたらしい。彼にしてはとても珍しくロゴもるよつにして話しだした。

「伝承が何かか？」

「いえ、神聖クメール帝国の正式な文書の中に記述があるので、全くの英雄譚というわけではないかと」

「・・・・・正式な・・・・？」

「はい」

「いや……はいって……」

正式な文書です。どうなずくフォンビレートに、レライとシシリアは複雑な胸中を隠せない。

この執事がいろいろと規格外なのは思い知っているが、それでも、いがみ合っているはずの神聖クメール帝国の正式文書を見ることが出来る環境つて……という気持ちが湧き上がる。

「まあ……一応言うけれど……」

「どうして、貴様はそれを見たことがあるのだ?」

カルデア王国とクメール帝国との間は、出入国が厳しく禁じられている。

カルデア王国側は、クメール帝国からの亡命者を受け入れることは稀にあるが、それも厳しい審査を通過しなければならない。

一方クメール帝国側は、カルデア王国を憎んでいたので、国境にかなりの兵を配置しており、亡命者であろうとなんであろうと、即殺される。

それなのに、どうして?と思つても当然のことであった。

「見ることのできる環境に居たことがあるので」

胡乱な眼で見られても、フォンビレートは淡々としていた。

「どうやつて?」

「ジャッコバ盗賊団に、よつてです」

「・・・はあ!?

「それは……15年前の誘拐事件を起こしたまま逃亡した、ジャッコバ一味のことか?」

驚愕のままにレライが問えば、フォンビレートは「よく普通に肯定した。

「ええ、そのジャッコバと一味の者にです」

ジャッコバ盗賊団とは、レライの言つとおり、15年前に多数の貴族の子供を誘拐していたことで知られる知りての盗賊団だ。捕まら

ないまま逃亡に成功したと言われていて、未だ一部では人気がある。

「あれって確か貴族の子供ばかり狙っていたんじゃなかつたかしら？」

「身代わりです」

間髪入れずに返つてくる答えに、シシリアもそういえば……と思いついた。

「……そう言えば、身代りにされたことがあるとか何とか聞いたことがあつたわね……まさか、ジャッコバ盗賊団とは思わなかつたけれど……」

拾つた次の日に言われたような気がする。確かに『買った奴を殺して、逃げた』とも『追つてきた奴も全滅させた』とも言つていたような気がする。……

うん、この際、無視だ。

シシリアは心中さわやかに決意すると、フォンビレートの方に向き直つた。

「で？ クメール帝国に売られたんだ？」

「ええ、男娼を探していた、神聖クメール帝国の神殿に売り払われました」

フォンビレートの明かす事実に、2人とも大いに納得した。

『男娼』にこれほどぴつたりの造形はないだろうなあ、というのが共通の思いだ。

「……失礼な」

心の内を敏感に感じ取つたフォンビレートは、わずか不満そつひとつやく。

「でも……ほら……ねえ……」

言つべき言葉が分からぬシシリアのじどうもどろの言葉に、フォンビレートはますます瞳を剣呑に細めたが、ややあつて諦めたように力を抜いた。

「ともかく、そのようなわけで2年ほど神殿にいたことがあります。

その時に、暇つぶしに書庫の本を読み漁りました・・・

どこかで聞いたようなフォンビレートの言い分に、レライは眉をあげた。

自分が騙された最初のステップは忘れられるはずもない。

「私を買ったのが、見るだけが好きという変態だったもので、暇で暇で仕方なかつたので」

なんでもないことのようにフォンビレートは言つたが、実際その場面をちょっとと思い描いた2人は吐き気を催した。そんな情報要らなかつた、と心底思う。

気持ちが悪さから逃れるために、シシリアは強引に話を元に戻した。

「その時に、公式の文書を見たのね？」

「ええ、その通りです」

「狂い病について、クメールの連中は何か知つてているのかしら・・・」

「いえ、それはないかと。説明によれば、そのような病にかかるのは『イシュタルへ反抗の精神を抱いたもの』か『蔑むべき畜生共』だそうですので」

『イシュタル』は、全知全能の創造神と崇められ、クメール人に信奉されている。彼らは、何か不幸が起こると『信仰が足りないからだ』というような人間であるし、医者とは神官と同義であった。

そのように『すべては、イシュタルの思し召し』で事足りる彼らは、また、『畜生共』と他種族を蔑む傾向にある。

つまり、その文章を要約すれば、『偉大な神様を信奉しない、クメール人以外の人でなし共とそれに与する者ども』が狂い病になると言つてしているのであって、全く持つて使えない。

「なんというか・・・どこまでバカなのかしら？・・・ちょっと心配になるわ」

物憂げに虚空睨むシシリアにレライも首肯した。

迫害されていった日々から幾月経とうとも、腐敗がやむことはないのだ、と思う。

ほんの少しの時間、執務室は沈黙が続いたが、気を取り直してレイは質問を再開した。

「では、どこにそのような記述があつたのだ？」

「クメール年代記の7892項に、赤を頂く女戦士の伝説が載っています」

「赤髪・・・？」

「はい。黒髪ではなく、赤髪です」

強調されるそれに、レライは再び驚いた。

クメール人の特徴は黒い髪と黒い瞳である。差別を容認する彼らが、クメール人以外の話をすることが自体が珍しく、それも正式な文書に載せられているとは、ちょっと信じがたいものがあった。とともにかくにも、聞いてみなければ始まらない、とシシリアが先を促す。

「それで？」

「はい。その64行目に次のような記述があります。『彼の女人は誠に強し。生涯に敗北なし。友を呪詛によりて失いて。幻に惑わされること數度。森を彷徨いて、喉を渴きを訴。度重なる不幸は多幸感を増し加えた。温情を与えしはイシュタル。覆いを用いて三日三晩を過ごす。光に出会いしその後を知る者はおらず。』」

「・・・・・」

「この数ページ後で、この女戦士は『畜生共に心を傾けたため』イシュタルの加護を失い、そこで言及は終わります」

「それって・・・・・」

「はい、『赤髪』の『誠に強い』『女戦士』で、クメール帝国出身の『クメール人に反旗を翻した』・・・全ての条件に合づるのは、1人しかおりません」

「「エメリカ！？」」

ピタリと重なつた叫びに、フォンビレートは頷く。

「はい、近衛隊初代隊長・エメリカ・フォーへント・ド・ゴモロのことを指すと思われます」

狂い病 後篇（前書き）

書き上がりました！…でも、全然まとまりない…どうしよう…。
ネタが良くても腕が良くないとダメだ…とつぶづく痛感していますが、何はともあれ、間に合ってよかつたとほっと一息します。

といつわけで、後篇ぞいつ…。

狂い病 後篇

「・・・エメリカ・・・」

シシリアとレライとが揃つて間抜けな顔をしているが、それも無理はない。

エメリカと言えば、史上最強の剣士とも言われる人物だ。女性でありながら、そのすば抜けた腕力を駆使して敵をなぎ払っていた、と伝えられている。

1300年ほど前に滅び去った『ジ・アンク皇国』の姫であつたとか、初代皇帝の愛人であつたとか、とにかく伝説が多い。その中には、クメール帝国の冒険者上りであつたという逸話もある。

「しかし・・・・」

1500年以上前の人を引っ張り出されて、反応に困つたレライは何とか言葉をつなごうとするが、結局、黙り込んだ。

確かに、彼女が赤髪であったこと、近衛隊長になれるほどにすば抜けて強かつたこと、クメール帝国への反乱に参加していたことは全て事実であるが、だからと言ってにわかには信じがたい。

「この赤髪の女戦士の伝説が載っている前の頁は、クメール暦889年の大飢饉に関する報告が記載されています。一方、次の頁は、クメール暦897年に『畜生共』の間で起きた内紛が起きたと記されています。おそらくこれはコルベール暦3年に起きた、ルツヤン暗殺未遂事件のことでしょう。したがって、年代的には

「綺麗に合致するわね・・・・」

「はい」

「それに、それらしき症状の記述もあるな・・・・」

「はい、見る限りでは『狂い病』に必ずつきものの、幻覚症状を指していると言つてよいでしょう」

唐突に出てきた、信頼できるか信頼できないのか微妙なラインの話に3人とも黙り込んだ。

実際、この話が本當だとしても処理の仕方が無限にあるわけではない。クメール年代記はそれが『イシュタル』によつて治つたと言つてるのであつて、具体的な解決策を明示してはいない。

そして、エメリカは既に亡くなつている。

彼女の症状が本物かどうかわかつたところで、流用できる情報は実に少ない。

「…………分からぬ部分も多々あるな」

「はい」

整理するために口を開いたレライの言葉に、フォンビレートも同意する。

「呪詛で失つた友、などはよく分かりませんね……」

「度重なる不幸が多幸感を増し加えた。なんて、もっと分からぬわよ」

彼らの言ひ方とおり、エメリカを指すと思われる文章の中に理解の至らない点が多くて、ビニをとつかりにしてよいのかがさっぱり分からなかつた。特に『二日三晩で』治つた、というのが実際の期間なのか、誇張法なのか、まずそこからして分からぬ。彼らが知る限りの症状でいえば、そんな軽いものではないような気がする。つまりところ、決定的な解決策への道はないということだ。

どうするか……と黙り込む中、再びフォンビレートが口を開いた。

「ひとまず、現地視察というのはどうでしょつか?」

唐突な提案に、シシリアが首をかしげる。

「それ、有効な手立てになるかしら? 今まで成功していないので

しょう?」

記録されている限り、それぞれの季節ごとに2回以上の探索が行われている。

これ以上やつたところで、なにかが変わるとは考えにくい。シシリアはそう考えて、反対をしようとした。レライも同じような表情をしている。

だが、フォンビレートは別の考えがあるようだつた。

「ええ、ただし、これまでとは状況が違います。先ほどの文書を肯定すれば、『森の中を彷徨いて』となっていますから、確実に未開拓地の中で起こったということです。そうなると随分と範囲は狭くなります」

年代記の話を持ち出した時よりも幾分、確信がこもるフォンビレートの言葉にレライも思考を中断し、注意を向ける。

「どういふことだ?」

「もし、エメリカが森の中に踏み入れるとすれば、北のワルメールではなく、南のアーデルハイトということになります」

「・・・・・そうか、当時はワルメールまで到達していなかつた・・・」

レライは素早く頭の中に地図を描きだす。

エメリカの出身地・クメール神聖帝国とカルデア王国、それにロンドー大統一帝国に面する形でアーデルハイトは広がっている。一方、ワルメールはカルデア王国建国後、発見された『不可侵の森』だ。最北に位置するため、南側に位置するクメールとは真反対になる。

よつて、エメリカがクメールに居ながらにして踏み込むとすれば、アーデルハイトである確率が高い。

「そうであれば、ワルメールの開拓を行つてゐる土地が探索対象地ということになります」

そうであれば、最初に比べて、随分と狭い範囲での搜索を行える。

「それも、1500年前の時点ですでに開拓が終わつていた地点と

なると・・・・

「かなり範囲が絞れるわね・・・・

「はい、その通りです」

かなり具体的な提案に場が瞬間明るくなるが、すぐにレライのまつたが掛つた。

「それは、確かに有効だろうが・・・それを調べる手立てはない」「苦々しげに吐き出されたそれは、妥当な意見である。

地図というものがカルデアで正式に作られたのは、冒険者ギルド設立より十数年前からだ。もともと、地図を作っていた組織がギルドの元となっているから、ギルドがない年代には地図は存在しない。もちろん、各個人でつくっていたものはあるだろうが、それが原型を残している可能性は極めて低い。

「せいぜい・・・・・70年、80年といったところだろう・・・・

「王宮に残っているものでも、・・・100年より前のものはないでしょうね・・・」

レライの意見にシシリシアも同意した。

100年ほど前に、王家に献上されたものが残っていたような気がするが、そもそも地図に価値が付されたのはそのあたりの年代だ。それより前は、案内人の方が重要な役割を担っていた。

王家にないということは、本当に、ないということだ。

もしかしたら、冒険者の子孫が持っているかもしれないが、それが読み取れる状態で保存してある可能性は限りなくゼロに近い。

「そこで、提案なのですが・・・・

小さく口を挟むフォンビレートに目を向けると、彼らしい不敵な笑みを浮かべている。

「イッサー ラ先生を頼るといふのはどうでしょうか?」

完全に思考の外からやつてきた提案に、2人はしばし固まった。

ややあつて

「・・・・・ その手があつたか・・・・・」

彼の提案は突拍子がないわけではなく、むしろ、冷静になれば妥当なものである。

だが、冷静さを欠き、煮詰まつていた頭には衝撃的な提案だつた。

「いや・・・・ あの先生なら可能だらうな・・・・・」

「ええ・・」

目を遠くにやりながら、自分達の師とも言ひべき人物を脳裏に描き出す。

王都中の識者を集めても引けを取らないだらうと言われる頭脳。今年の年齢を知る者はおらず、100歳とも500歳とも噂される不可思議な存在。

歴史の転換点に必ず顔を出すため、世襲制ともささやかれる人物。それが、ペンタグ孤児院院長・イッサーラ・ハズメイド・ダ・ペントラグの良く知られた顔である。

少々、化け物じみたところがある彼には、その冠する『ペンタグ』という名も、彼が王都の名前から取つたのではなく、彼から王都の名前が取られた、という話があるほどだ。まさに、『よういけんかい妖異幻怪』を地で行く人間であった。

「の方は、一体何者なのだろうな。・・・ 知らないことなどないかのようだ」

「いつか、御本人にお聞きしましたら『生まれる前のことは知りませんよ?』とごまかされたわよ?」

イッサーラの意地の悪い誤魔かし方を身をもつて知つている2人は、その口調が容易に想像できた。

たぶん、煙に巻くように掴みどけるのない考え方なのだろう。頭に思い描く、人を食つたような笑みになんだか寒気を覚えて、むりやり思考を戻す。

「開拓地の地図を持つているとは思いませんが、あらゆる文献から範囲を狭めてくださるかと」

フォンビレーーの言葉にシシリアは大いに頷いた。

彼、つまりイッサーラーが全ての学者から羨望のまなざしを受けるのは、生き証人であるかのような真実味のある話をするからではなく、まして、深い考察を行なうからでもない。

『イッサーラの眞実はイッサーラしか語れない』

生徒たちの間で語り継がれるこの言は、彼がどれほど荒唐無稽な話をしようとも、それは後に必ず証明されることになる、といつ絶対の信頼を表している。

シシリアにしろレライにしろ、あるいはフォンビレーーにしろ、そこに一片の疑いも抱いてはいない。

推測でしかないそれが、彼の手によって、手品のように証明されしていく様を一度でも見たことがある者は、そのあまりの美しさに囚われてしまうのだ。3人とも例外ではなかった。

ひとまず、イッサーラ先生頼みになることに異論はない。

「分かった、イッサーラ先生にご足労いただこう」

僅かの逡巡もなく、シシリアは決断した。すぐに、指示を飛ばす。

「レライ、手配してくれ」

「・・御意」

昨年春の騒動以来となるレライは氣まずさを頭の隅に追いやるつゝに、無表情にこらえながら返事をする。それが、シシリアの無言の命令わだかまりをなくせであることを理解したので、従順に出ていくため、足を外に向けた。

それを見届けてから、シシリアはフォンビレートにも指示を出した。

「それから、フォンビレート。騎士団に前もって通達を」

「どちらの騎士団がよろしいでしょうか?」

「……ファーガーソンではだめだらうか?」

しばし考えた後、団長を認識しているファーガーソンをシシリアは選んだ。

だが、フォンビレートがそれを否定する。

「だめ、ということはないかと思いますが、ファーガーソンでなければならぬ理由もないかと」

やわらかな言葉ではあるが、団長と顔見知りかどうかで決めるな、とやんわりたしなめていることが分かる。

顔を見る限り恐らくもつといい方法があるのでひとつ。

「じゃ、じゃあ……あなたの意見は?」

考えを早期に放棄して、フォンビレートの意見を逆に聞いてしまう。それに対して、フォンビレートは至極当然のように、口を開いた。

「コールファレス王立騎士団といつのはどうじょうつか?」

「えっ? ……コール……」

彼が口に出したのは、王立騎士団中最も戦闘に特化している「コールファレス」だった。

決して探索に飛びぬけた団ではないので、シシリアは驚いているが、それを知り目にフォンビレートは平然と続けた。

「コールファレスの団長は、コモロ辺境伯の嫡男ではなかつたかと記憶しておりますので」

「ああ……」

その理由にシシリアは納得の声を上げる。

コモロ辺境伯とは、名前が指し示す通りエメリカの子孫である。

ミユーズ共和国との国境を守る領地を持ち、その武力でもつて平和に努めている。

もっとも、ミユーズ共和国は芸術家が多いだけの変人国家であり（フォンビレートの談）軍事の面でいえば、全くの無害であるので、

本当に屈強な兵士が必要かどうかは長いこと富殿で議論されている。建国時に何らかの密約が交わされたのではないか、というのが大方の見方だ。

噂は噂でしかないので、誰も表立つては言わないが。

それはともかくとして、コモロ辺境伯の嫡男である人間が団長ならばこれ以上ないほどの人選である。

「もしかしたら、エメリカが残した文書などを聞くことができるかもしれませんし」

「そうね・・・」

フォンビレートの言つとおり、探索隊といつになれば、エメリカが書き残した地図などを探すことを”公の”命令としてさせることができる。

それが分かった、シシリアはすぐに命令を下した。

狂い病 後篇（後書き）

そういうえば、前篇にちょっとだけ書き足していたのを忘れていました。

アメリカの役職の点です。

改稿された後に見た方は大丈夫ですが、もしかしたらその前に閲覧してしまった方もいるかもしれません。見ても見なくとも筋には関係ありませんが、見られる方は、狂い病前篇の最後の行あたりをご覧になつてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6570y/>

その執事、大胆不敵

2011年12月21日12時47分発行